

親子の日

絆 (KIZUNA) コンクール

作品集

Vol.1 (2013-2018)



第1回親子の日絆(KIZUNA)コンクール

実施要綱

- ・応募期間 2013年4月15日～6月30日
- ・テーマ 「親子」「家族」の絆(きずな)
- ・応募資格 台東区内にある小学校に通う3年生～6年生の児童とその家族の方(任意参加)
- ・表現方法 作文／絵てがみ／フォト日記／ビデオレターなどで、子どもが自分の「家族」や「親」に直接語りかけるように文章に表現し、自由な発想で作品を提出。
- ・審査基準 家族や親子の絆を、自分なりの言葉や発想をもとに、作品に表現できていること。
文章の中に、直接家族に語りかける場面が一部でも入っていること。
- ・応募作品について
 - 〈作文部門〉 ・400字詰め原稿用紙に日本語で3枚以内。作品は右肩をホチキス留めのこと。
 - 〈絵てがみ部門〉 ・絵、手紙(文章)ともに小学生が作成すること
・A4もしくはA3用紙(縦長／横長不問) 紙質不問(画用紙等、展示に耐えられる質が望ましい)
 - 〈フォト日記部門〉 ・写真…小学生もしくは家族 日記(文章)…小学生
・写真は、プロカメラマンが撮影したものを除く。
・フィルム写真またはデジタル写真をプリントして、A4もしくはB4、A3サイズ用紙(縦長／横長不問)に貼り付けて、文章を添える。
・デジタル写真の修正は、トリミングのみ可。
・紙質不問(画用紙等、展示に耐えられる質が望ましい)
 - 〈ビデオレター部門〉 ・撮影者…家族 被写体…小学生もしくは小学生を含む家族
・映像時間は、3分未満 ・DVDに焼いて提出
- ・後援 DACグループ 大分県杵築市教育委員会 台東区教育委員会

優秀賞(五十音順)

- 川光留 台東区立上野小学校3年生 写真付作文「ぼくのゆかいなお父さん」
- 有馬來海 台東区立上野小学校3年生 イラスト・写真付作文「あわてんぼですてきなお母さん」
- 泉奈々花 台東区立上野小学校3年生 イラスト付作文「わたしのじまんのおばあちゃん」
- 梅澤忠央 台東区立上野小学校3年生 絵手紙「ビールがすきなお父さん」
- 枝村詩音 台東区立平成小学校5年生 作文「一つだけの家族」
- 大松真子 台東区立上野小学校3年生 イラスト付作文「家ぞく、世かいー大切なたから物」
- 角岡桃子 台東区立上野小学校3年生 イラスト付作文「大ききなパパをかんさつしたよ。」
- 岸田彩花 台東区立上野小学校3年生 写真付作文「こわくてやさしいわたしのお母さん」
- 工藤明佳璃 台東区立上野小学校3年生 絵手紙「大ききなばあばのしょうかい!!!」
- 河野雅妃 台東区立大正小学校3年生 作文「おつかい」
- 坂本朱羅 台東区立金竜小学校6年生 作文「協力してくれて本当にありがとう」
- 渋谷優花 台東区立黒門小学校5年生 作文「家族の支え」
- 清水雄司 台東区立上野小学校6年生 写真メッセージボード「お兄ちゃん大好き」「なかよしFamily」
- 杉山紗菜 台東区立上野小学校3年生 イラスト付作文「家ぞくを守ってね、お母さん」
- 鈴木将好 台東区立上野小学校5年生 絵手紙「お母さん、お父さん、いつもありがとう」
- 多賀眞理奈 台東区立上野小学校4年生 作文「絆を生むあいさつ」
- 丹野夏綺 台東区立上野小学校3年生 イラスト付作文「おしごとがんばる!!お母さん」
- 寺本美紀 台東区立上野小学校3年生 イラスト・写真付作文「いつまでも仲よし家ぞくでいようね」
- 富田珠実 台東区立東泉小学校4年生 作文「お姉ちゃんがいてよかった」
- 中村心優 台東区立上野小学校3年生 イラスト・写真付作文「わたしの理そうのお母さん」
- 長谷川もも 台東区立上野小学校3年生 写真付作文「また行こうね!ステキな家ぞくりょ行」
- 藤本愛菜 台東区立上野小学校3年生 絵手紙「お母さんありがとうそしてごめんなさい」
- 堀越大地 台東区立平成小学校5年生 作文「家族との歩み」
- 眞木薫 台東区立平成小学校5年生 作文「家族のつながり」
- 丸山来都 台東区立平成小学校5年生 作文「家族の絆」
- 湊ほのか 台東区立田原小学校4年生 絵手紙「弟の入園」
- 三村遙 台東区立富士小学校4年生 絵手紙「がんばれたプール」
- 山本嗣紋 台東区立黒門小学校3年生 絵手紙「天国のおじいちゃん元気ですか」
- 吉岡歩 台東区立金曾木小学校3年生 絵手紙「大好きなお父さんへ」
- 吉田奨 台東区立平成小学校5年生 作文「とても大切な家族の絆」

※第1回～第5回を通して、所属校、学年は受賞当時のものを記載しています

親子成長日記(私とママをくらべて)

今井優花 台東区立平成小学校3年生

親子成長日記 3年 今井優花

<たんじょう>	身長	体重	頭の大きさ
優花	47.0cm	2.566g	29.0cm
ママ	48.5cm	3.250g	31.5cm

どっちが大きい?
むかしのオムツは、^{おの}布だったんだ?!

優花 ママ

<5才>
そつえん式
もうすぐ一年生

優花 ママ

<6才>
自転車に乗れるようになった。
ママはしまじりん、わたしはほじょなし!
優花 ママ

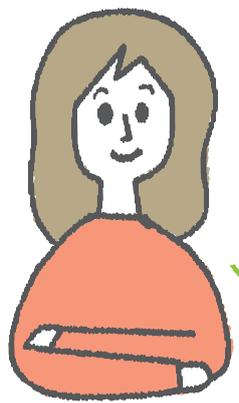
優花 ママ

<8才>
ワオ! そ、くり、ママといっしょに記念ねんさつえい。小さいころのしゃんをくらべると、すぐくにはいることがわかった。

私にとっての「絆」とは

人と人の切ることのできない
結びつき

DAC



保護者より

受賞前は、小学校3年生で、一人っ子だったせいもあり人見知りで消極的な子でした。受賞後すぐには変化はありませんでしたが、今、中学生になり、色々な事に積極的に取り組んでいます。副賞で参加させていただいた旅行で、現地の小学生とふれ合った事が優花にとって大変良い経験になったのだと感じています。

これから、たくさんの人に出会うと思いますが、いつも優しく感謝の気持ちを忘れずに人と人の結びつきを大切に成長して行ってほしいです。

リアルママ

鈴木直斗 台東区立上野小学校3年生

これからぼくの自まんのママのしょうかいをします。

ママのゆめをはじめに書きます。ママのゆめはパン屋さんになることだったようです。いつもお店のパンを見て気になって、長い時間パンを見ながら店内をぐるぐるしてました。

次にママのきれいなことについて書きます。ママはこちょこちょとくすぐるのが一番好きです。ぼくがそれをやろうとするまねをしただけでも「やめて〜!」とひめいをあげてにげまわります。

ママのせいかくは、おこらなくても、おこっていてもかわらずいつもこわい!ということです。でもテンションがプラスに上がっている時にはとってもやさしいです。

また、ぼくは、スケートを習っているので、毎週水土日はずっと行きます。何回もやっているでぼくはもう、かなりうまいですが、ママは、スケート場に来てほとんどやらないので、うまくなりません。だから毎日毎日行ってもなれないから、「こわいよ〜!」とこれまたずっとひめいをあげます。少しのことでおどろいてしまうせいかくなので、いつ行ってもやらなくてもさげんかしてしまうので、ぼくはわらってしまいます。

そんなママにもとくいなことがあります。ママはなわとびの二十とびがとくいです。わかいころは三百回ぐらいできたそうです。それはおどろきの回数です。今、ぼくは三回れんぞくがやっどですが、ママは、今でも三十回ぐらいとべます!!

さい後にママへのかんしゃを書きます。

「ママーおく才ぐらい生きてばくといっしょに生活しよう。けっこんするあい手がいなくなったらママとけっこんするって決めたいよ!!

だからママ、ずっとずっとそばにいてね。元気でステキなママでいてね。!!」直斗より

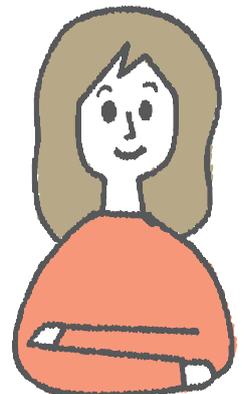
私にとっての「絆」とは

安心なこと



保護者より

決して上手な文章ではないけれど、直斗の素直な気持ちのよく表れている作文だと思います。私の事について書いてくれただけでも嬉しいですが、旅行までプレゼントしてくれてどうもありがとう。



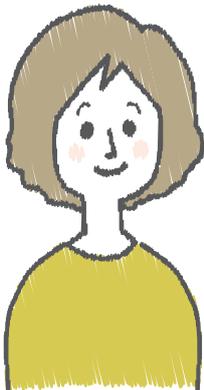
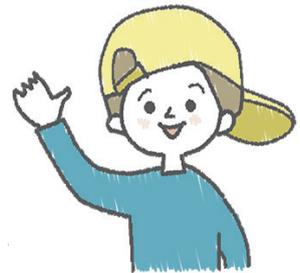
絆(KAZOKU)

林龍之進 台東区立上野小学校5年生



私にとっての「絆」とは

友人や家族との
心の繋がり



保護者より

突然の電話で受賞の知らせ!! 応募していた事も知らず、はたまたこんなに素敵な詩が書けるとは思わず、家族みんなでびっくり。感動した日を懐かしく思っています。家族が喜ぶ姿を誇らしげに受賞後も自分の目標に向かい一生懸命頑張っていました。しかし…只今思春期真っ盛り。期待はしていません(笑)ただ、人と人の繋がりを大切に、そして大切な人達を守る強い男になって欲しいと願っています。

第2回絆（KIZUNA）コンクール

実施要綱

- ・応募期間 2014年6月2日～8月31日
- ・テーマ 「親子」「家族」の絆(きずな)
- ・応募資格 台東区内にある小学校に通う3年生～6年生の児童とその家族の方(任意参加)
- ・表現方法 課題6コースから1つ選び、いずれか(複数箇所でも可)に親子・家族で訪れ、写真と絵(もしくはいずれか)のビジュアルと共に「親子の絆」「家族の絆」をテーマに作文を提出する。
 - ①大自然を遊ぼう!コース(山や海などの自然に家族と一緒にふれあう体験)
 - ②お勉強しちゃおう!コース(博物館や美術館などに出かけて一緒に学ぶ体験)
 - ③台東区みりよく発見!コース(台東区の地元の魅力を家族と発見する体験)
 - ④夏のイベント・おまつりコース(花火大会やおまつりに参加する体験)
 - ⑤おじいちゃん、おばあちゃんふれあいコース(祖父母とのふれあい体験)
 - ⑥おとうさん、おかあさん、おしえてコース(父母から子どもに技術や作法などを伝える体験)
- ・審査基準 家族や親子の絆を、自分なりの言葉や発想をもとに、作品に表現できていること。
文章の中に、直接家族に語りかける場面が一部でも入っていること。
- ・応募作品について
 - 〈作文／必須〉 ・400字詰め原稿用紙に日本語で3枚以内。作品は右肩をホチキス留めのこと
 - 〈絵／選択〉 ・応募する小学生が描くこと
・A4もしくはA3用紙(縦長／横長不問) 紙質不問(画用紙等望ましい) 原稿用紙に描くのも可
 - 〈写真／選択〉 ・写真・・・小学生もしくは家族
・写真は、プロカメラマンが撮影したものを除く
・フィルム写真またはデジタル写真をプリントしたものを提出
- ・後援 DACグループ 大分県杵築市教育委員会 台東区教育委員会

優秀賞 (五十音順)

- 村田江子 台東区立谷中小学校6年生 「やっぱり家族が全員いると楽しい」
- 村田風子 台東区立谷中小学校6年生 「家族がいたから」
- 田崎朋香 台東区立谷中小学校6年生 「初めて作った料理」
- 周翰鰲 台東区立東浅草小学校5年生 「楽しい家族旅行」
- 勝山こころ 台東区立金曾木小学校5年生 「いそ遊びに行ったよ」
- 村田想 台東区立谷中小学校4年生 「やさしい父と母」
- 岡ちえり 台東区立田原小学校3年生 「大根とねぎの味噌汁を作った」

審査員特別賞

- 多賀眞理奈 台東区立上野小学校5年生

ママとの料理

上野真桜 台東区立大正小学校3年

私のママは、料理が上手です。

たとえば、カレーです。にんじんと、ジャガイモと、お肉と、緑のほうれんそうが入っています。具とルーがたくさんかかっているの、おいしいです。次に牛丼です。ママの手作りの牛丼のたれがとくに好きです。何が入っているのかわかりません。牛、たまねぎに、たれがたっぷりかかっています。あとは、キンピラです。キンピラには、にんじんに、ごぼうが入っていて甘い物が入っています。

私は、ママのおいしい料理が大好きです。だから私は、ママに料理が教えてほしいです。私は料理がほとんどできないので、もっと教えてほしいのです。ママが一番たくさん作ったのが「玉子焼き」です。さいしょは、玉子をわったとき、白みがとびちって、おこられました。二回目はせいこうしました。玉子におさとうを入れました。まぜた後、フライパンで、1分ぐらいまったら、ほとんどできていました。食べたらおさとうを入れたので甘かったです。

マドレーヌも作りました。玉子を三つぐらいわって、まぜました。その後おさとうを入れて、またまぜました。あとは「かた」に入れて、オーブンに入れます。そして、ふくらんでやけたらかんせいです。甘くておいしかったです。

私は、まだ「玉子焼き」と「マドレーヌ」しかおぼえていないので、ほかにも、たくさん料理をママに教えてほしいです。

ママといっしょに料理をたくさん作って、たくさん料理をおぼえて、ママやパパ、二人の弟、いとこ、ママのお姉ちゃん、おばあちゃん、おじいちゃん、ひいおばあちゃんに、たくさん食べてもらって、たくさんおいしいなど、言ってくれたらすごくうれしいな。

カレーや牛丼、野菜のいため、ハンバーグ、ラーメン、チャーハンなどたくさんの料理を食べてほしいし、おいしいと言われたいです。

ママ、これからたくさん料理を教えてね。



私にとっての「絆」とは

大切なもの



保護者より

下に弟が二人います。これまでは、余り弟たちの面倒を積極的にみる方ではありませんでした。受賞後、初めて九州へ行かせていただき、知見を広げたり、家族のことを改めて自分なりに考えた影響なのか、下の弟たちのお世話を少しずつするようになりました。

そして、弟たちにも少し優しくなったかな、と思います。

これからは、もっともっと弟たちから尊敬され、頼られるような素敵なお姉さんになっていってくれることを期待しています。



お母さんって大変だ

富田珠実 台東区立東泉小学校4年生

お母さんは時々料理をする時「大変だな」とつぶやいています。私は料理が好きなのでお母さんがつぶやくたびに不思議に思っていました。そんな日が続いて不思議に思っていることが増えている時に、お母さんに「梅シロップを一緒に作らない。」

と言われました。私は、すぐに返事をして梅シロップを作る事にしました。

それから数日後、お父さんが梅とさとうを買ってきました。そこからはみんな、梅を洗ってへたをとり、氷らせました。たくさん梅があったのでとても大変でした。

梅シロップ作りはみんなのいる土曜日に行いました。まず、梅とさとうの重さをはかって交じり混ぜて梅を入れました。それから三週間ずっと私は何度もピンをまわしたり、ふったり、ひっくり返したりして、早く食べたい気持ちをおさえて待ちました。さとうがだんだんとけていく時にお母さんと、

「色がきれいになってきたね。」

「早く食べたいね。」

とおしゃべりをして、ようやく梅シロップができました。三週間後の土曜日に家族みんなでテーブルに集まってかき氷にできあがった梅シロップをかけて食べました。お姉ちゃんに

「すっごくおいしい。」

と言われてうれしかったです。そして、みんなおかわりをしてたくさん食べました。なので梅シロップは夏休みが半分も終わらないうちになくなってしまいました。

私が梅シロップを作ったのは、たった三週間でしたが、お母さんは家族のために、1日3回毎日ごはんを作っています。私は大変な思いをして作った梅シロップを食べた時、お母さんが料理をする時いつも言う「大変だな」という言葉の意味がようやく分かったような気がしました。

料理は人を楽しくし、元気にします。また料理を食べた人の感想は、作ってくれた人をうれしくさせるということも分かりました。だから、これからはお母さんが作ってくれた物にきれいな物が入っていても、がんばって食べればお母さんはうれしいと思います。

お母さん、いつも料理を作ってくれてありがとう。梅シロップはすっごくおいしかったし、みんなで作れて楽しかったので、またやる時があったらさそってください。いつでもお伝いするのでたくさん料理をおしえてね。



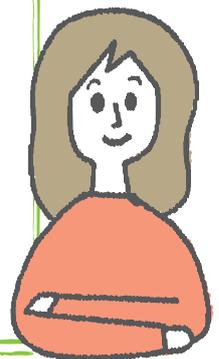
あなたにとっての絆とは？

何年経ても
うすれないもの



保護者より

コンクールに参加したことで、親子の絆について意識して深く考える機会を得ることができ、うれしく思っています。招待して頂いた大分では、着物を着ての城下町散策、黒田さんのお話、たこの踊り焼き等々、日常では決して体験できないことばかりで、刺激的だったようで、今でも話題にのぼります。チャレンジする一歩を踏み出すことで、そこから大きな可能性が広がるかもしれないことを学び、学校生活でも意欲的に活動しているようです。娘は「やってみないとわからない!」とたまに言っています。これからも積極的に社会の中に入って行くことを期待しています。



お祭り、ワッショイ

福原日菜 台東区立谷中小学校5年生

「見て、お馬さんだよ。」

私は、興ふんして妹に声をかけました。

八月二十五日のことです。今年は、三年に一度の大きなお祭りです。いろいろな町内会を、てんぐのかっこうをした人や、人力車に乗った人や、船の形をした乗り物に乗った人が行列します。私の家のすぐ前の道路を、本物の馬が歩いています。私は、小学五年生なので、三年前の二年生の時にも行列はあったのかもしれませんが私が見たのはこれが初めてです。

この日の午前中は、町内会のお祭りがあり、私もおみこしをかつぎました。前の人の足をふまないように少しガニまたになり歩きます。子どものおみこしは三年生からかかげます。かたの位置がみんなちがうので、合わせるのが大変でしたが、「ワッショイ」と声を出すと、とても力がわいてきました。私は、とんで妹をだっこして歩いているお母さんを見ながら、妹に聞こえるように「ワッショイ」と声をはりました。

三年生の時も四年生の時もおみこしをかつぎましたが、今年の私はこれまでとはちがいます。私は五年生になってお姉さんになりました。今まではお母さんにはちまきをしてもらい、おびをしめてもらいましたが、私はもうお姉さんです。自分でできることは、自分でしなければいけません。少し小さめの体で生まれた妹も、もう三カ月になり、声をかけると笑うようになりました。私は妹に向かって「ワッショイ」と言いました。妹は久しぶりの外出できん張っているようでしたが、お母さんがやさしく笑っていたので、私も笑顔で「ワッショイ」と言いました。

夕方になり、行列を見るため、家の前の道路に出ました。行列が私達の目の前を通ります。「見て、お馬さんだよ。」

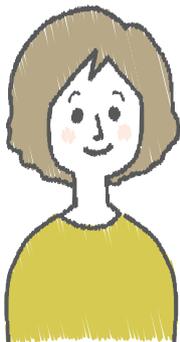
私は興ふんして妹に声をかけました。私は道路を歩く馬を見たのは初めてでしたが、妹は馬を見るのも初めてです。馬に乗った人が小さな妹を見て、手をふってくれました。私はうれしくなり、妹の手を取って、ふりました。

次にこの行列を見ることができるようになるのは、三年後です。その時も妹といっしょに、その時は妹と手をつないで見ることができるようになるでしょう。その日がとても待ち遠しいです。



あなたにとっての絆とは？

信 頼



保護者より

今年は、作文で書かれていたお祭りからちょうど3年の年でした。娘は、3歳になった妹と一緒に見るのを楽しみにしていましたが、ちょうど法事で宮城に帰省しており、見る事ができませんでした。3年後、またその先も、姉妹が仲良くお祭りを見て、思い出を共有し、絆を感じ合えると嬉しいなど、親として願っています。

第3回 絆 (KIZUNA) コンクール

実施要綱

- ・応募期間 2015年4月13日～6月19日
- ・テーマ 僕の / わたしの親子の絆を深める日常体験!
- ・応募資格 以下の対象地域小学校に通う3年生～6年生の児童とその家族の方 (任意参加)
(対象) 東京都全域、北海道仁木町、大分県杵築市
- ・表現方法 親子・家族いっしょに過ごした体験から、写真と絵(もしくははずれか)のビジュアルと共に「親子の絆」「家族の絆」をテーマに作文を提出する。
- ・審査基準 家族や親子の絆を、自分なりの言葉や発想をもとに、作品に表現できていること。
文章の中に、直接家族に語りかける場面が一部でも入っていること。

・応募作品について

- 〈作文 / 必須〉 ・400字詰め原稿用紙に日本語で3枚以内。作品は右肩をホチキス留めのこと
- 〈絵 / 選択〉 ・応募する小学生が描くこと
・A4もしくはA3用紙(縦長/横長不問) 紙質不問(画用紙等望ましい) 原稿用紙に描くのも可
- 〈写真 / 選択〉 ・写真…小学生もしくは家族
・写真は、プロカメラマンが撮影したものを除く
・フィルム写真またはデジタル写真をプリントしたものを提出
・デジタル写真の修正は、トリミングのみ可。

- ・後援 DACグループ 台東区教育委員会 北海道仁木町 北海道仁木町教育委員会
大分県杵築市教育委員会



優秀賞 (五十音順)

- 油木ひなた 台東区立忍岡小学校4年生 「家族の応えん」
- 綾部梗平 杵築市立杵築小学校3年生 「カナヘビと家族」
- 石井結菜 台東区立浅草小学校6年生 「お母さんの思い」
- 石山海斗 台東区立松葉小学校3年生 「楽しかった思い出」
- 大西舜平 仁木町立仁木小学校5年生 「ハイタッチ」
- 大松真子 台東区立上野小学校5年生 「新しい家族」
- 小川結 台東区立黒門小学校4年生 「つなげていきたい味」
- 岸田文花 台東区立上野小学校3年生 「すてきなおばあちゃん」
- 木村華菜 台東区立忍岡小学校4年生 「世界に一つだけのわたしの宝物」
- 木村莉子 台東区立忍岡小学校4年生 「お母さん、大好き」
- 久保日和 仁木町立仁木小学校3年生 「お母さんありがとう」
- 栗田里香 台東区立平成小学校4年生 「大好きな家族」
- 黒木隼世 台東区立谷中小学校5年生 「ぼくがコーヒーをいれる理由」
- 黒田想悟 台東区立平成小学校4年生 「お父さん、お母さんありがとう。」
- 河野ほのか 台東区立大正小学校4年生 「宝物の時間」
- 河野雅妃 台東区立大正小学校5年生 「世界で一番おいしいパンケーキ」
- 残間深喜 台東区立黒門小学校3年生 「おじいちゃんのこと忘れないよ」
- 島野風佳 練馬区立中村小学校6年生 「ママの背中」
- 多賀卓真 台東区立上野小学校3年生 「きずな」
- 多賀眞理奈 台東区立上野小学校6年生 「家族の絆」
- 滝口風鈴 台東区立平成小学校4年生 「にこここ家族」
- 中西優那 台東区立平成小学校4年生 「大好きなお父さん」
- 新見明音 仁木町立仁木小学校5年生 「私のお父さんとお母さん」
- 長谷川蓮 台東区立平成小学校4年生 「おじいちゃんってどんな人？」
- 原田直緒 台東区立平成小学校4年生 「ぼくのじまんのおじいちゃん」
- 本田優美香 杵築市立北杵築小学校5年生 「わたしのお母さん」
- 光武道江 杵築市立立石小学校5年生 「家族の絆」
- 山田莉那 台東区立松葉小学校3年生 「家ぞくは宝物」
- 吉田恭子 台東区立平成小学校4年生 「家族で行った伊豆旅行」
- 渡辺真花 台東区立平成小学校4年生 「またりょこうつれてってね」

祖父から学んだ絆

草深希 台東区立松葉小学校5年生

私の祖父は、約8年前に脳梗塞になった。病気のため体が動かしにくく、記憶も途切れ途切れになってしまったが、退院した後、祖父は私と約束してくれた。希のためにお仕事ができるようになる。だから頑張ってリハビリするよと。約束してから祖父はそれを守るため、リハビリを兼ねて緑色の警備員の服を着て、一日5km以上歩く仕事についた。そんな距離を歩くので、仕事から帰ってきた時は、ものすごく疲れているはずなのに、私の前で優しい笑顔でいてくれた。私は、そんなリリしい姿を見せる祖父を尊敬していた。



約2年経ったある日、来月から本格的に仕事に復帰できるまで病気が回復した祖父のお祝いに、親せきが集まった。その日の夜、頭から階段を落ちてしまい、救急車で運ばれた。そして、病気が重くなった。事故以来祖父は、どんどん記憶をなくしていった。まず、私の従姉の名前をすぐに分からなくなった。そして、新しい事を記憶できなくなった。もちろん、私との約束も忘れてしまった。それから間もなく、トイレやお風呂に一人で行けなくなった。そんな祖父を必死に介助をする祖母にきつい言葉を吐くようになった。その時私は、祖父との絆が薄くなってしまったと感じた。

ある日、母と祖母と一緒に祖父のいる施設に行くことになった。祖父は、私の顔を見てなかなか思い出せないようだった。私を見て怪訝そうな顔をしている祖父に、どんな顔をして接すれば良いか分からなかった。しばらくしてから、祖父は私の頭をゆっくり、ゆっくりと優しくなで、笑顔を見せてくれた。それから二人で写真を撮った。病気が重くなって以来、シャッと立ってられないはずなのに、私が小さい頃、緑色の制服を着て仕事をしていたリリしい祖父と同じ姿だった。その時、私は気が付いた。私から絆が薄くなったと勘違いしていただけだった。

最近、人と人との繋がりが、絆が薄くなってきているという話を良く聞く。血縁関係にある祖父に対してでさえ、そう感じてしまったくらいだ。

でも、考えてみると、人間は一人で生きていけない。多くの人との絆がなければならぬのだ。それでは、絆を作り、保つためにはどうしたら良いのだろうか？相手の事を思いやり、助け合うこと、裏切らないこと、感謝の心を持つこと、これらを継続していく事だと考えた。

私の一番の夢である囲碁のプロ棋士になるためには、多くの人と絆を築き、保っていく事が必要だ。

そのために私は誓う。人の話を良く聞き学んでいく。一人で解決できないことは、恥ずかしながら、協力をお願いする。そして、相手の信用・信頼を裏切らないために、努力をしていくことを。

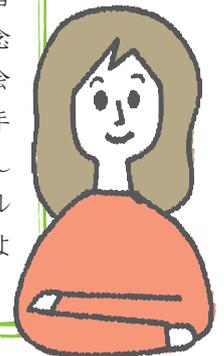
私にとっての「絆」とは

「私を導く誘道灯」



保護者より

「お母さん、図書券がもらえるかもしれないからこの作文コンクールに出してみたいんだけど。」3年前、娘からの相談がありました。学校からの夏休みの課題である読書感想文コンクールに出す文しか自ら文を書かない娘からの突然の提案。これが、DACさんと娘の絆の始まりでした。北海道の旅行には、中国囲碁留学や日本棋院の院生手合いのため2回とも参加ができず残念がっていましたが、受賞後に開催されることになったDAC囲碁会で多くの方々との新たな縁を築くことができました。ところで、2年前に娘が「絆は切るのは簡単。でも築くのは大変。だから大切じゃなくてはいけませんね」と、言っていました。きっと、このコンクールに応募するのをきっかけに、『絆』という言葉について熟考するようになったからだと感じます。ありがとうございました。



お母さんと私の楽しみ

高橋佳那 仁木町立仁木小学校5年生

「早くふとん入って、本読もう。」

そう言ってふとんに入ります。私にとっての夜の楽しみは、お母さんが本を読んでくれることです。図書館で借りた本を毎日毎日きまったお気に入りの場所で読んでくれます。それが私とお母さんとの、絆だと思います。

私は、小さいころから、本を読んでもらっています。ずっと本を読んできました。私は本を読んで自然に文字をおぼえて、お母さんは、私に文字を教えたことがないようで

「佳那は、ママが読んでいる本で文字をおぼえたんだね。」

とお母さんは、言っていました。文字を、苦労しないでおぼえられたことには、とても感しゃしています。

「お母さん。たくさん本を読んでくれてありがとう。おかげで、たくさん文字や言葉をおぼえられて、今では役立ってるよ。」

本を読んでくれているお母さんの横にいると、最も幸せな気分になります。やさしい声で、ぬくぬくとしたあたたかさ、ときにはねむたくなり、ねてしまうことがあります。お母さんの声が、こもり歌になって、夢の中に入ってしまいます。お母さんもねむたくなくて途中でねてしまうこともあります。そんな時

「いやーまたねちゃった。」

と私は思います。私は、いつも本を読んでもらっている時、想像のつばさを広げて聞いています。絵が無いページにも頭の中には、その場面の様子が思いうかんでいます。本の話もよくします。このあと物語は、どうなるかとか、登場人物の話など本の話をしていると盛りあがります。

私は、大きくなってもお母さんに本を読んでもらいたいです。あっちろん自分でも本はよく読んでます。

でもお母さんと一緒に私はうれしいです。

「お母さん。いつまでも私の横で、やさしい声で、そして、ぬくぬくしたあたたかさで本を読んでね。」

お母さんは、

「一日の中で、佳那の横で本を読むのが一番楽しみなんだよ。」

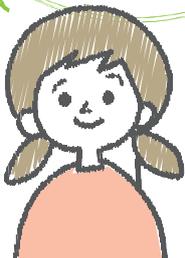
と言います

「私もだよ。お母さん。」



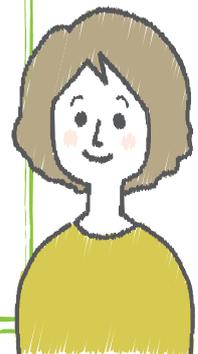
私にとっての「絆」とは

宝物



保護者より

こんにちは。受賞後もこのように絆コンクールに関わられてうれしく思ってます。夏にも今年を受賞者さんと交流ができて、東京の親子さんと少しの時間でしたが、お話し、交流できて楽しかったです。娘は5年生と6年生の時にこのコンクールで最優秀賞をいただき2回東京に招待していただきました。スカイツリーが見える絶景のオフィスでの表彰式は感無量でした。受賞式後は、TVでスカイツリーや浅草、国家議事堂など映ると、ここ行ったねーなど会話しうれしくなります。中学生になった今年は、絆コンクールには応募できなくなってさびしいですが、今年は誰が東京へ行くのかなって気になりましたよ。今後親として期待する事は、将来的な事は具体的には思いつかないですが、中学校で一先けん命勉強して、まずは志望校の高校に合格してほしいです。



お風呂の時間

高橋秀平 台東区立蔵前小学校6年生

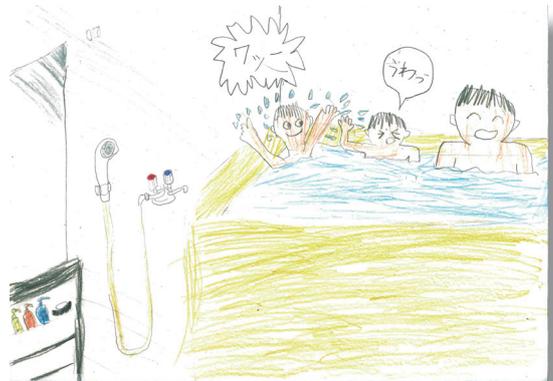
ぼくは、お兄ちゃんとお父さんと一緒にお風呂に入っているときがすごく幸せです。友だちと遊んでいるときも楽しいけど、こんなふうには幸せだと思えることはありません。ふしぎです。

お風呂の中ではいろんな話をします。ぼくの好きなF1のことを、お父さんはたくさん知っているでいろいろ教えてくれます。お兄ちゃんとは、飼っている魚のこととか学校のこととかを話します。となりの洗面所でお母さんが歯をみがいているときは、お母さんもいっしょに話をすることがあります。はなししていると、いやなことがあった日も、わすれて元気になることができます。

この前、お兄ちゃんが林間学校で4日間いなかったときがありました。

ぼくとお兄ちゃんをよくけんかするので、いなくなったらせいせいすると思っていました。でも、お兄ちゃんがいないと、お風呂の時間も、なんだかいつもより幸せな気持ちになれない気がしました。最初の日から、何かさびしい感じがして、早く帰ってきてほしいと思ってしまいました。

考えてみたら、家族みんなでいっしょにいるときは、安心できるし、楽しいです。だから、この前お風呂から出て体をふいているとき、お母さんに「ぼく、お風呂の時間が一番幸せなんだよ。それから、家族みんなでどこか遊びに行っているときも幸せ。」と言いました。そうしたら、お母さんは「じゃあ、みんなでどこか遊びに行く予定を立てないかね。」と言って、にっこり笑いました。そう言っているお母さんの顔も幸せそうだったので、ぼくはうれしくなりました。



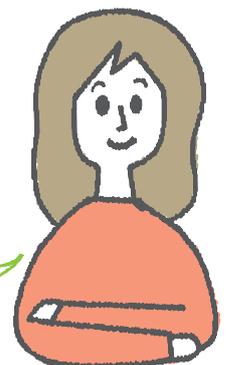
私にとっての「絆」とは

友達



保護者より

受賞後変わったことは特にありませんでしたが、あれから彼もずいぶん大きくなって、そういった意味では色々な変化があります。一人で風呂に入るようになりましたし、あの頃のように兄や父親と楽しそうにおしゃべりすることも少なくなりました。ただ、今も変わらないと感じるのは、家庭が彼にとって安らぎの場所になっているということです。だからこそ、学校など外で頑張っているのだと思います。今後彼には、失敗や挫折など辛いことがあっても、それを乗り越えて、力いっぱい自由に、自分の人生を生きてほしいと願っています。



家族とお茶つみ

高山聖菜 杵築市立北杵築小学校5年生

わたしのお父さんは、杵築茶生産組合の組合長です。だから毎年、四月下旬から五月上旬の二週間、お茶つみをしています。ゴールデンウィーク中は、私もお茶つみの手伝いをしています。私の仕事は、お母さんが運転する軽トラックに乗って、いっしょにお茶を運んだり、お茶が入っているふくろをとじたりすることです。ほかには、お茶つみをしているお父さんやお母さんに、

「大丈夫?のどかわいてない?」

と声かけをして、飲みものをもっていきます。

手伝いをしているときに何度も、「めんどうだな」と思ったときがありました。お茶がたくさんとれて、ふくろいっぱいになったときも、車から機械にうつすのが重くて、いやになることもありました。そのたびにお父さんやお母さんのがんばっている姿を見て、「わたしもがんばらなくては」という気持ちになりました。お茶つみをしていると、お父さんの職場の人から、

「すごいね。次もがんばってね。」

と言われるとうれしくなって、またがんばろうという気持ちになりました。私がつんだお茶を、いろんな人に「おいしい。」と言ってもらって、お茶を好きになってもらいたいと思います。

お茶つみをする中で、お父さんの大変さを改めて知りました。お父さんは夜中の二時に工場に行っているのです、すごいと思います。そこでは、機械でお茶をもみながらかんそうしています。昼間のお茶つみだけでなく、夜中も働き、私の倍以上働いているので大変だなと思いました。お父さんは機械の調子が悪くなくても、「もうだめだ」とあきらめなくて、すぐに直してまたがんばるところもすごいなあと思います。そんなところをまねしていきたいです。

お父さんは、

「最近、きゅうすでお茶を飲む家が少なくなってきている。」

と言っています。だから、きゅうすでお茶を飲んでほしいし、どうやったらそれが広まるか考えているそうです。私もその話を聞いて、確かにそうだなと思います。最近、お店や自動販売機で簡単にお茶を飲むことができるし、お茶以外にもいろいろな飲み物があるから少なくなってきたのかなと思います。でも、きゅうすでお茶を飲むのは、大切な日本の文化だから、これから家族でお茶つみをして、お茶のおいしさを伝えていきたいです。



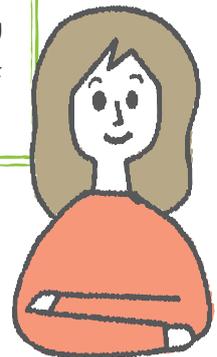
私にとっての「絆」とは

協力し、助け合うこと



保護者より

その節は大変ありがとうございました。たくさん経験させていただき、本人もとても勉強になったことと思います。今回の受賞で本人にはとても自信になり、学校での発表などもすすんでできるようになりました。とにかく人見知りをする子でしたので、人前での発表などが出来るようになり本当に嬉しく思います。御社様のコンクールでの体験をさせていただき本当にありがとうございました。



お姉ちゃん 本当は大好きだよ

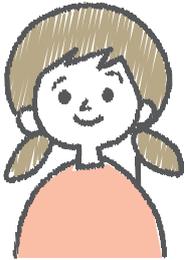
堀桃菜 仁木町立仁木小学校4年生

私には、こわい姉がいます。私は、いつも、「遊ば。」と言うのにお姉ちゃんは、「動きたくないし、妹と遊ぶなら、同級生と遊んだ方がましだし。」「しかも部屋に入らないで。」「早くあっち行って。」と言ってきます。「小さいころは、やさしかったな。」と思います。私と姉の小さいころは、とても仲がよかったのです。アルバムを見ると、顔をくっつけている写真や鬼といっしょに写っている写真などがあります。小さいころ私は、お姉ちゃんのまねが大好きでした。今は、しません。理由は、お姉ちゃんが、「やめて、まねするな。」と言うからです。昔とかなりかわりました。たまた、「昔にもどりたいな。」と思ってしまいます。ケンカも昔とくらべてとても多いです。でも、「ケンカしても仲はいい。」て言いますから。それに、私が頭の手じゅつの時も、病院へ来てくれませんでした。今、「お姉ちゃん。」とよぶと、「何。」とおこって言ってきます。でも、たまた仲のよい時だってあります。昔より数は、へったけれど。それは、お姉ちゃんの気げんがしい時です。めったにないけど。でも、お姉ちゃんが遊んでくれた時は、ずっと私は、スマイルです。とてもうれしいからです。お姉ちゃんは、私のことがきらいだと思います。だって、きびしいし、こわいから。でもいいんです。自分でお姉ちゃんをきらいにさせてしまったのだから。でも、きらいじゃないでほしいです。私がなぜこのコンクールに応じたかというと、賞は、取りたいけど、特に、お姉ちゃんときずなを深めたかったからです。そして、今までお姉ちゃんに言えなかった言葉、「本当は大好きだよ、お姉ちゃん。」



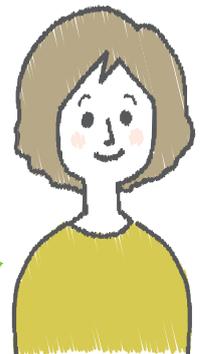
私にとっての「絆」とは

人と人との
繋がり



保護者より

受賞前の姉は、学校、剣道の事で、ピリピリしてました。桃菜が絆コンクールで最優秀賞を頂き、桃菜の作文を見て色々感じたのでしょう。東京から帰って来て残りの夏休みは桃菜を小樽、札幌と連れて行ってくれたり優しくなりました。今でも部活で忙しい姉ですが、オフ日には桃菜と遊んでくれます。仲良しになりましたよ。来年は中学生、素直なそして姉のように優しい人に育ってほしいです。三年間コンクールに参加させて頂きありがとうございました。



半分ママちゃん

森愛花 台東区立上野小学校5年生

私は、三姉妹の次女です。双子の姉と私が五才の時、妹が産まれました。妹は生まれた時からとても体が弱く、生後九日目で大きなケイレン発作をおこして、入院しました。東京には、祖父母やしんせきなどたよれる大人が少なかったのも、双子の私たちと入たい院をくり返す妹のお世話で、母はとても大変そうでした。泣きひきつけをおこす妹を一日中だっこしている母。そうじ、せんたく、おふろ、ごはん作り、私たちの世話とても大きいせがしで、妹の体がしっかりしてきて、おんぶができるようになった時、母は「やっと背中が使える、両手が自由になった～」と、とっても喜んでいました。その時の母の口ぐせは、「カニさんになりたいな～。手がいっぱいあるからいいなあ～」でした。泣きひきつけをおこさないようにと赤ちゃん用のふとんどだっこする母。そんな中で育った私たち双子は、ミルク作り、おせんたくたみ、そうじぎ、ぞうきんがけ、洗い物とゲームをするように、毎日家事育児を手伝っていました。妹が半年になったある日、母が脳がすい体しゅようというとくていしっかんの病気にになりました。「七年前も同じ病気で手じゅつしたのよ。だから、なれっこよ。大丈夫」と言って笑っていましたが、はくことが多くなり六才になった私達は不安でいっぱいでした。まだまだ小さな生後半の赤ちゃん。来年一年生になる双子の私達。とにかく赤ちゃんと一緒に育てるぞ!! と毎日、姉とミルクをのませたりだっこをしてゲップを出させてあげたり、り乳食を食べさせたりと、一生けん命でした。



赤ちゃんのお世話は、動くお人形さんのようで今、思うとママゴトのようで楽しかったです。三月六日、妹が一才になりました。その五日後、大地しんが、わが家をおそいました。病気で家事育児でひどくつかれている母は、よしんにたえられず毎日、おうとがひどくなり、父母のいなかの奄美大島へしばらくの間、帰ることにになりました。奄美大島は大自然で空気がきれいですがせんもんの、病院が少なく今までは帰らずにいました。

帰ってすぐに祖母やしんせき、母の友達などが遊びに来てくれて「大変だったでしょ～」「大丈夫だった?」どこにいても、たくさんの人から声をかけられ、母は「私一人で育ててないのよ。半分は、この子たちが育ててくれたのよ。半分ママちゃんだもんね♡」と泣きながら笑う母を見て、母を妹をこれから守っていこう、助けていこうと一年生になった私は、そう思いました。

私は、半分ママちゃんです。大事な家族といつまでも、おだやかに静かに生きていきたいです。大切な大好きな家族がいて、私は、幸せ半分ママちゃんです!

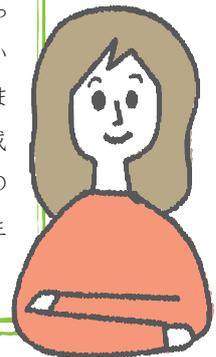
あなたにとっての絆とは?

「寄り添う」



保護者より

毎朝の日課で三姉妹の「髪を結ぶ」事によりスキンシップと会話を自然と身につけて来ました。お洒落に敏感な最近の子供達は髪型やゴムを選ぶだけでも明るい会話が朝から弾みます。登校前の慌ただしくも賑やかなこのような時間は私の何よりも大切な「癒しの時」でした。有り難いことに2年連続の最優秀賞受賞後、何かと自信をつけた娘は自分で結ぶようになり、更には三人仲良く結びあっこをして、嬉しくも、ほんの少し寂しいゆっくりとした朝が来ました。こうやって巣立っていくのだなあ。としみじみ思いに更ける…のも東の間、每晚膝枕をしておの耳そうじブームが起っています。子供への今後の期待は「焦らずゆっくりゆっくりと自分のペースで成長してほしい」です。いつかは大人になる子供達。同じ時間を過ごせるのは今だけです。つい先日、娘が「精一杯お互いの心に寄り添いながら生きていけたらみんなが幸せだよ」と言った笑顔が印象的でした。



第4回絆(KIZUNA)コンクール

実施要綱

- ・**応募期間** 2016年4月18日～6月17日
- ・**テーマ** 日常で感じた親子・家族の絆!
おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃん、きょうだい、いとこ、ペット…
家族と過ごす日常の中で感じた "絆"について考えてみよう。
- ・**応募資格** 全国の小学校1年生～6年生の児童
- ・**表現方法** 親子・家族と一緒に過ごした経験から、上記のテーマにそった作品を提出する
(作文部門:応募者本人が書いた作文)
(絵・写真部門:応募者本人が描いた絵、または応募者本人が撮った写真のどちらか)
- ・**審査基準** 家族や親子の絆を、自分なりの言葉や発想をもとに、作品に表現できていること。
- ・**応募作品について**
 - 〈作文部門〉 ・400字詰め原稿用紙に日本語で3枚以内。作品は右肩をホチキス留めのこと
 - 〈絵・写真部門/絵〉 ・応募者本人が描いたもの
 - ・A4(210mm×297mm)もしくは、A3(297mm×420mm)用紙(縦長・横長不問)に描かれたもの
 - ・紙質不問(画用紙が望ましい) ・筆記具不問(絵の具、クレヨン、色鉛筆、鉛筆など)
 - 〈絵・写真部門/写真〉 ・応募者本人が撮影したもの ・2Lサイズ(178mm×127mm)以上にプリントしたものを提出。
- ・**後援** DACグループ 台東区教育委員会
北海道仁木町 北海道仁木町教育委員会 北海道余市町教育委員会

大人が変われば子供も変わる
このころの東京革命

審査員特別賞

- 城間一綺 台東区立浅草小学校5年生 作文「お母さんの味・おばあちゃんの味」
- 藤澤佐保姫 台東区立松葉小学校5年生 作文「わたしの宝物」
- 藤澤佑紀姫 台東区立松葉小学校1年生 作文「だいすきでじまんのおねえちゃん」
- 青木朋翔 江戸川区立西一之江小学校4年生 写真「いましかないかたち」
- 山田暁人 台東区立田原小学校1年生 写真「手をつなごう!」

優秀賞 (五十音順)

- 秋山桂太郎 墨田区立墨田小学校4年生 作文「ぼくと家ぞくの思い出」
- 池畠心 台東区立田原小学校1年生 作文「おとうとがうまれて」
- 市村優衣 千代田区立富士見小学校5年生 作文「真実の絆」
- 岸田彩花 台東区立上野小学校6年生 作文「お酒が大好きなわたしのパパ」
- 久保日和 仁木町立仁木小学校4年生 作文「家族にかんしゃ」
- 倉井望帆 台東区立金竜小学校4年生 作文「私から家族へのきもち」
- 黒田ひなた 仁木町立仁木小学校6年生 作文「私のお母さん」
- 中島桜 台東区立忍岡小学校1年生 作文「わたしたちのなまえ」
- 新見剛大 仁木町立仁木小学校4年生 作文「家族の絆」
- 原田蔵之介 仁木町立仁木小学校6年生 作文「お母さん、これからもよろしくね」
- 堀桃菜 仁木町立仁木小学校5年生 作文「自まんの家族」
- 山田莉那 台東区立松葉小学校4年生 作文「お姉ちゃんお兄ちゃん、ありがとう」
- 吉本結 台東区立富士小学校5年生 作文「家族がいなかったら」
- 赤上文 板橋区立成増ヶ丘小学校1年生 絵「おなじ月」
- 大高捺 台東区立根岸小学校4年生 写真「ひいばあちゃんと弟」
- 鴨志田理緒 台東区立千束小学校5年生 絵「だいすき、ゆっぴい」
- 日下部悠太 江東区立豊洲北小学校4年生 絵「さくらいろのきもち」
- 櫻井羽奈 余市町立沢町小学校3年生 写真「カップル」
- 鈴木匠美 台東区立忍岡小学校4年生 絵「ぼくと妹とおにいちゃん」
- 田崎朱莉 台東区立谷中小学校3年生 写真「かげが4 つならぶ」
- 吉本志 板橋区立成増小学校3年生 絵「秘境発見、親子探検隊!!」
- 米長大吾 江東区立第三砂町小学校2年生 絵「ぼくが生まれた日」

彼方からの伝言

草深希 台東区立松葉小学校6年生

私は去年の夏休み、囲碁の勉強をするため、北京の道場に留学をした。正直言って、最初は後悔の連続だった。ベッドは硬いし、トイレや、お風呂の衛生環境が日本と全く違う。言葉が分からない。日本の囲碁ルールでは勝っているのに、相手から負けたと言われる。何故負けたのか理解できない。相談や、泣き言や、わがままを言えるいつもそばにいる母がいない。苦しくて、寂しくて、教室に入れない。布団に包まり声を潜め、枕をぬらした。

母に電話をして、

「来なければ良かった。帰りたし。」

と言った。すると母は、

「三日だけ頑張ってみて。三日頑張れたなら、あと三日だけ頑張れると思う。そしたらあつと言う間に一週間だね。希なら最後まで頑張れるよ。一週間いても駄目なら、帰って来なさい。」

と、言われた。

去年は、終戦七十周年で大規模な式典を行うため、北京市民の反日気運が高まっていた。

留学先の道場は一人で寂しそうにしている私を見て、家族のように暖かく受け入れてくれた。寮母さんは、私が泣いていると母のようにそっと抱きしめてくれた。道場内外で反日気運が高まっているため、道場のホームページに「希は日本の私たちの友人だ。共通の趣味はどんな事があっても絆を切ることができない。」と紹介してくれた。

それから沢山の友人ができた。多くの友人がiPadで日本語に翻訳し、説明してくれた。勉強が休みの日は、私が日本語を聞きながらやっているだろうと考え、みんなで日本のアニメを観た。友人の親も週末に来ては、私と一緒に誘い食事をしてくれた。私の心の隙間は、道場の先生、友人、友人の両親からのあふれんばかりの絆が埋めてくれた。

私はあの時、何故母は帰って来ていいよと言わなかったのか考えた。私と会いたかったはずだ。心から帰りたしと言っていたのは理解してはいたはずだ。では何故そう言わなかったのか？それは、私と母で築き上げた絆に他ならない。私なら最後までやり遂げられると確信していたからだと気付いた。

「いろいろな困難があっても志を失わず最後までやり遂げる精神を持つ。」これは、私の大好きな格言の一つだ。その時、私はこの言葉を思い出した。

留学期間を無事に終え、三週間ぶりに空港で母と会った。何故だか涙は出てこなかった。

「ママー!!」

と、駆け寄ってこない私を見て、母は不思議そうな顔をしていた。留学をして、母や、友人、友人の両親、先生、北京の人々との絆を知り、築き、深める事ができたから、私はちょっぴり大人になったのだ。これは、母には内緒にしておこうと決めた。

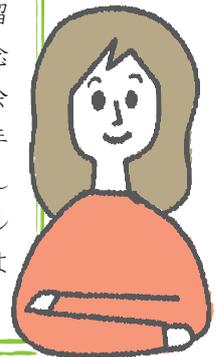
私にとっての「絆」とは

「私を導く誘道灯」



保護者より

「お母さん、図書券がもらえるかもしれないからこの作文コンクールに出してみたいんだけど。」3年前、娘からの相談がありました。学校からの夏休みの課題である読書感想文コンクールに出す文しか自ら文を書かない娘からの突然の提案。これが、DACさんと娘の絆の始まりでした。北海道の旅行には、中国囲碁留学や日本棋院の院生手合いのため2回とも参加ができず残念がっていましたが、受賞後に開催されることになったDAC囲碁会で多くの方々との新たな縁を築くことができました。ところで、2年前に娘が「絆は切るのは簡単。でも築くのは大変。だから大切なくてはいけませんね」と、言っていました。きっと、このコンクールに応募するのをきっかけに、『絆』という言葉について熟考するようになったからだと感じます。ありがとうございました。



わたしとママのキズナ

熊澤沙羅 中央区立月島第三小学校1年生

あれはわたしがねんちゅうのときでした。

ある土曜日のことでした。

わたしとママはおおげんかをしました。

わたしはあさテレビを見てぐだぐだしてしまいました。それでおこったママに、あたまをたたかれました。すっごくいたかったです。わたしはギャーギャーなきつづけてほいくえんにおくりとどけられました。ママはしごくにいきました。

きょうしつに入ってもかなしくてなにもしませんでした。そしてろうかをおるいていると、入口のほうからハァハァいいながらしごくにいったはずのママがものすごいいきおいではしってきたのです。としょしつによばれてまたおこりにきたのかもしれないとおもいました。でもママは「ごめんね、ごめんね。あたまたたいてごめんね。」といいました。

おかあさんがあやまりにくるなんてしんじられませんでした。

おかあさんは「こんなきもちでママおしごといけなくて。あやまりにきたんだよ。」とぼろぼろなきながらいいました。

ふだんはんせいしないわたしが、あのときはほんとうにはんせいしました。

いまでもちよくちよくけんかはしますが、わたしもママもおたがいのことがしぬまでだいすきです。

私にとっての「絆」とは



親や友だちの
せつたいに失くならない
大切な物

保護者より

このコンクールを知ったのは小学校に入って少したったばかりの春、まだランドセル姿も幼い頃でした。「私、ママとのきずな、書いてみる!」と意気込んでみたものの初めて書く作文。初めて見る原稿用紙。

頭の中に、これを書こうという構想らしきものはあったようですが、句読点や鉤括弧の使い方も覚束なく、書式の説明から始まりました。そして全く予期せぬ受賞、北海道旅行の体験は彼女の内に大きな足跡を残してくれました。

二年生の今、「あなたにとって絆とは」という質問に「決して無くならないもの」と応える我が子。絆とは余りにも脆弱な故に常に懸命に手練り寄せ続けねばならないものだ親の私は思うのに。限りない無垢なエネルギーに溢れる彼女を眩しく感じるとともに力強く輝きながら未来を切り開いていってくれることを期待します。



祖母との時間

高橋佳那 仁木町立仁木小学校6年生

私の母は土曜日も仕事なので、となり町に住んでいる祖母の家にあずけられます。私はこの時間がひそかに楽しみでもあります。

祖母はとても強い人で虫がいて私がキヤーキヤー言っても何くわめ顔でさっさと虫を払いします。さらにハエなら、五十センチのものさしを取り出し、バシッと当て命中させます。祖母は十年以上も、一人でくらしていて、夜一人ぼっちで寝ていて「おばけとかこわくないの?」と私が聞いたら「なんもこわくないよ、かなちゃんこわいのかい。おばけがいるなら会ってみたいわ。」と言うのです。本当にこわいもの知らずです。

私は祖母とこんなことをして過ごしています。色々なお話をしながら散歩をします。そのとちゅう、春ならふきのとうや山菜を採ったり、夏なら海を見に行ったり、秋にはくりやくるみを拾ったりします。さいている植物の名前や特ちょうなどを教えてくれます。春や秋に採ったものをあつというまに調理して「これ二人で採ったものだよ。」とごちそうしてくれます。いつもおいしくて祖母はインターネットみたいは何でも知っているなあとと思います。トランプ対決もします。紙に表を作り、勝てば一、負ければ二を書き入れ最終的に数が小さいほうが勝ちです。火花ばちばちさせた白熱した対決です。近くのスーパーに買い物に行くこともあります。主に半額商品をねらいます。祖母は買い物上手でかしい買い方を教えてくれます。

祖母の家には母が子供のころ使っていたピアノがあります。私はピアノをひくこともあります。ある日私がいつものようにピアノをひいていると、

「いいなママもひいてみたいわ。かなちゃん教えてよ。ポケ防止のためにも。」

※祖母のことを私は「ママミ」と呼んでいます。

と言いました。いつも私が教えてもらってばかりだったけれど、こんな私でも役に立つことがあるんだなあとうれしく思いました。祖母は楽しむ読めないし、ピアノのけんぱんの音の場所も分からないので、私が楽しむにドヤレを書いた紙をはってあげました。その日から毎日練習をしているようで、ドヤレを書いてはった紙の文字がうすくなり書き直したあとを見ました。祖母はがんばり屋さんだなあと思いました。いつか祖母と一緒に連だんして、ピアノが上手な母をびっくりさせたいです。今のところこのことは母には内緒です。

「ママミ。いつかはピアノを2人で連だんしてママをビックリさせようね。また散歩で山菜を採って食べたいな。これからもかなにいろんなこと教えてね。いつもありがとう。」

最後に一ついつになるかは分からないけど初めて給料をもらったら先に祖母にプレゼントをおくりたいと決めている私です。

私にとっての「絆」とは

宝物



保護者より

受賞後もこのように絆コンクールに関われてうれしく思ってます。夏にも今年を受賞者さんと交流ができて、東京の親子さんと少しの時間でしたが、お話し、交流できて楽しかったです。娘は5年生と6年生の時にこのコンクールで最優秀賞をいただき2回東京に招待していただきました。スカイツリーが見える絶景のオフィスでの表彰式は感無量でした。受賞式後は、TVでスカイツリーや浅草、国家議事堂など映ると、ここ行ったねーなど会話しうれしくなります。中学生になった今年は、絆コンクールには応募できなくなってさびいですが、今年は誰が東京行くのかなって気になりましたよ。今後親として期待する事は、将来的な事は具体的には思いつかないですが、中学校で一生けん命勉強して、まずは志望校の高校に合格してほしいです。



は一ちゃん

富張七音 台東区立富士小学校5年生

わたしのおじいちゃんは長野県に住んでいて、は一ちゃんといいます。は一ちゃんとわたしは血がつながっていないけれど、本当の家族のような仲です。は一ちゃんはいつもいろいろな事をしてわたしたちを楽しませてくれます。

一番に思い出すのはいっしょに登った山登りです。がんばって登った山のちょう上の景色はトンボが飛んでいてとてもきれいでした。そこで、は一ちゃんが作ってくれた大きなおにぎりをいっしょに食べました。

夏には流しそうめんもやってくれました。それは、は一ちゃんが本物の竹を竹やぶから持ってきて、わたるところから作ってくれました。わたった後、お庭に設置して流しそうめんをしました。つゆを入れる容器も竹で作ってくれました。竹の上を流れてくるそうめんは、家でいつも食べているのとはちがって少し竹の風味がした気がしました。緑の中で食べる流しそうめんはとてもおいしかったです。

ほかにもわたしの習い事の発表会や運動会の時にビデオをとってDVDにしてくれたり、とまりに行くと花火やバーベキュー、魚釣りなどとても楽しい計画を立ててくれます。

冬は雪でかまくらを作ってくれました。かまくらという言葉は知っていたけれど、東京では雪があまりふらないので、本物を見たのは初めてでした。この時はは一ちゃん一人で作ってくれたので、今度はいっしょに作ってみたいです。

は一ちゃんはいつも笑顔で、その場の空気を和ませてくれます。いつもやさしくておもしろいので大好きです。は一ちゃんは例えば「いいだにー」と語尾に長野県で使われる方言をつけて話したりして、初めて聞くわたしたちを笑わせてくれます。

わたしは一ちゃんは血がつながっていないけれど、まるでつながっているみたいにかわいがってくれます。強いきずなで結ばれているのだと感じます。

いろいろな事してくれるは一ちゃんに温かい料理を作って、今度はわたしがは一ちゃんを笑顔にしてあげたいです。



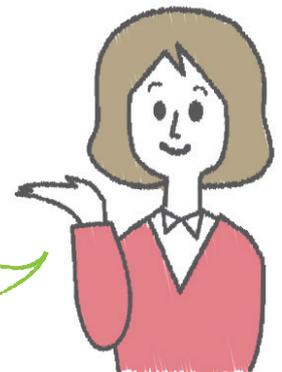
私にとっての「絆」とは

思いの深さ

保護者より

学校で受賞を知った七音から来た報告の電話の声は、今までに聞いたことのないような明るく自信にあふれるしっかりとした声でした。この思いがけない受賞を機に、自分に自信が持てたようです。それまで下の子として周りに助けられることの多かったこともあり、「今回は自分の力で賞をもらい家族を北海道に連れていくことができたんだ」という喜びがあったようです。私もこんなに早い親孝行をしてもらえるとは思っていませんでしたし、とても良い経験と思い出作りができました。子どもへの「期待」は子どもにとって負担が大きいと考えているため、しないようにしています。

七音には七音らしく笑顔で楽しめる日々を送ってもらえれば十分です。自分の関心のあることを追求していけるように、その手助けをしていきたいと思っています。



十五才のおじいちゃん

森愛花 台東区立上野小学校6年生

私の通学路に、お祖父ちゃんの家があります。登校中には「行ってきま〜す」と朝の挨拶をして、下校中には「ただいま〜」と毎日声をかけています。だけど、私達三姉妹は一度も会った事はありません。

祖父は奄美大島出身で、十五才の時に上野で商売をしていた叔父さんの家に、働きに来たそうです。

故郷から離れて、ホームシックになり、上野駅の丸い時計を見ると、お母さんの顔に見えてきて涙が出たり、たくさん節約をして、田舎の母に仕送りしたり、上野公園で友人やいとこ達と、すもうをして汗を流した思い出いっぱい大好きな上野で十年以上、暮らしていました。

祖母と結婚して、奄美大島で暮らしてからは、毎日のように「上野は第二の故郷、いつか、上野に家を買って、奄美大島と東京を行ったり来たりするのが夢なんだ」と祖母に話していたようです。

夢を叶えるために、事業を一生けん命に頑張って、その頑張り屋の祖父は、三十六才の時にガンで亡くなりました。

すいぞうガンの、とう病中も、痛みをこらえながら、「いつか叶わず、夢を叶えるんだ」と話していたそうです。

それから母が大人になって、祖母と協力をして、祖父の実現できなかった夢を叶えたいと、上野に家を買って、その家に今、私達は暮らしています。家の中には、祖父が大切にしていた、台東区から表しょうされた、古いしょう状が、いくつも額に入れて、かざってあります。私達三姉妹は、小さい時から、この話を聞いて育ったので、祖母や母の思いを受けついで、祖父が住んでいた家に、毎日挨拶しています。今、五十五年前にタイムスリップしたら、会えるんだよね。

「今日ね、先生にほめられたんだよ!!」

「今日ね、友達とケンカしちゃった。」

「今日ね、テストでね、百点満点とったんだよ!!すごいでしょ〜!!」

「おじいちゃん、私も頑張るからね!!安心して天国で暮らしてね」

「おじいちゃん、おばあちゃんは奄美大島で、幸せに暮らしているよ」

「おじいちゃん、ママね、おこりんぼうなんだよ…でもね、大好きなんだ♡」

こんな話を、毎日たくさんしているので見守ってくれていると感じます。

三女の一年生の妹は、大きな声で祖父の住んでいた家に、

「行ってきま〜す!!」「ただいま〜!!」と手をふります。だけど私達三姉妹は祖父に一度も会った事はありません。会ってなくても遠く離れていても、それでも祖父が大好きです。自慢のカッコイイおじいちゃんです。

「おじいちゃん!!行ってきま〜す!!」

あなたにとっての絆とは?

「寄り添う」



保護者より

毎朝の日課で三姉妹の「髪を結ぶ」事によりスキンシップと会話を自然と身につけて来ました。お酒落に敏感な最近の子供達は髪型やゴムを選ぶだけでも明るい会話が朝から弾みます。登校前の慌ただしくも賑やかなこのような時間は私の何よりも大切な「癒しの時」でした。有り難いことに2年連続の最優秀賞受賞後、何かと自信をつけた娘は自分で結ぶようになり、更には三人仲良く結びあいっこをして、嬉しくも、ほんの少し寂しいゆっくりとした朝が来ました。こうやって巣立っていくのだから、としみじみと思いへる…のも束の間、毎晩膝枕をしての耳そうじブームが起っています。子供への今後の期待は「焦らずゆっくりゆっくりと自分のペースで成長してほしい」です。いつかは大人になる子供達。同じ時間を過ごせるのは今だけです。つい先日、娘が「精一杯お互いの心に寄り添いながら生きていけたらみんなが幸せだよね」と言った笑顔が印象的でした。



おかあさんぐも

依田昊太 墨田区立両国小学校2年生

ぼくのおかあさんはくもです。なぜかと言うと、りゆうはたくさんあります。ぼくがようちえんせいまでは、ディビット先生やキャサリン先生、ジェシカちゃんやナセルくん。たくさん外国人の大人や子どもがいました。みんなはぼくにあったらギュッとだきしめてくれます。だからぼくもみんなをギュッとだきしめます。

外国ではハグはあいさつだとディビット先生におしえてもらいました。「日本ではあまりやらないのよ」とおかあさんは言いますが、ぼくはハグが大好きです。おかあさんはぼくが朝おきたときやよいえにかえって来たとき、まい旧たくさんハグをしてくれます。おかあさんは大きなくものように、フワフワしていてとってもちもちがいいです。

でも、ぼくがやくそくをまもらなかったりうそをついたとき、おかあさんはかみなりぐもになります。ゴロゴロ、ドッカーンとすごく大きな声でおこられます。かみなりとおなじくらいとてもこわいです。

そして、おかあさんはテレビを見てよくなります。かなしいときもうれしいときもよくなります。なみだがボロボロで、おかあさんは雨ぐもになります。

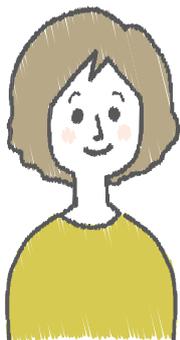
すこしまえにくまもとの大じしんのニュースを見ました。たくさんのおえがこわれてみんながなっていました。ぼくはびっくりしてとてもこわくなりました。その日のよにおかあさんがぼくにだいい話があると言いました。「昊太の今やるべきことはべんきょうすること。きょうかしょのべんきょうもあるけど、先生の話をおきくのもべんきょう。ともだちとあそぶのもべんきょう。本をよむのもべんきょう。だからまい旧たくさんべんきょうしてね」とおかあさんが言いました。

それから、またおかあさんはすこしこわいをおして、言いました。「いそがしくていつもいっしょにはいないけど、もしも大きなじしんがあったときは、かならずおかあさんがたすけにいから、それまでは先生のいうことをきいて、おかあさんをしんじてまっていなさい。おかあさんはかならず昊太をたすけるからね。」と言ってぼくをギュッとだきしめてくれました。

そのときぼくは「おかあさんはやっぱりくもなんだ。」と思いました。なぜならいつもちかくにいないけど空を見るときぼくを見てくれているくもみたくだからです。大きなフワフワくものおかあさん。かみなりぐものおかあさん。雨ぐものおかあさん。ほかにもたくさんあるけれどおかあさんはどんなにおおにいてもいつもぼくをまもってくれている「おかあさんぐも」だと思いました。だからぼくとおかあさんのきずなは「おかあさんぐも」で、ぼくは「おかあさんぐも」が大好きです。

保護者より

母親である私を気づかい、守ろうとしてくれる様になりました。その姿がとても頼もしく嬉しく思いました。息子の成長のすてきな“きっかけ”を与えて下さり、本当に感謝しております。ありがとうございました。



私にとっての「絆」とは

友だち・家びくをたいせつにするもの



さくらんぼ畑と妹と私

笠井愛葉 仁木町立仁木小学校4年生



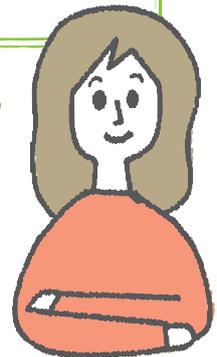
私にとっての「絆」とは

おたがいの気持ちを考え
1人1人が仲間に加えること



保護者より

受賞後、招待していただいた旅行で、キザニアやサンプル作りなど地元では出来ない体験をしてきたことで色々な事にチャレンジをしようとする気持ちが強くなった気がします。この先も色々な事に興味を持ち、何事にも挑戦して行ってほしいと思っています。



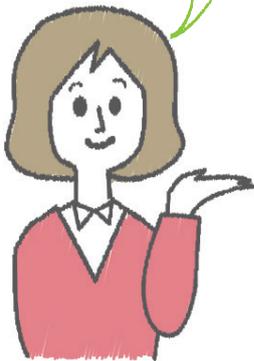
家族みんなでハワイの海を探検

佐藤世來 台東区立蔵前小学校4年生



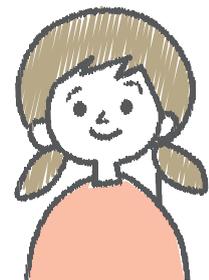
保護者より

特に大きな変化はありませんでしたが、受賞してから更に絵を描くようになりました。受賞がとてもうれしく自信がもてたようです。これから先も色々挑戦し自分に更に自信をつけ成長してほしいです。



私にとっての「絆」とは

思い出を
作るもの



おねえちゃんとおじいちゃんとおばあちゃん

湊漣太郎 台東区立田原小学校1年生



私にとっての「絆」とは

フナガリ

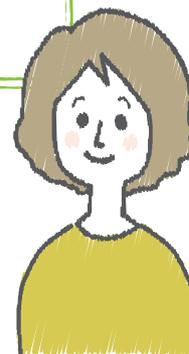


保護者より

受賞が自信になったのか、それまでどちらかといえば人見知りだったのが、受賞後は人と積極的に関わろうとするようになったなあと感じました。

北海道旅行で色々な人と知り合えたことも良いきっかけになったと思います。

今後は何事にも前向きに取り組めるようになってもらえたらいいなあと感じます。



第5回絆(KIZUNA)コンクール

実施要綱

- ・**応募期間** 2017年4月17日～6月14日
- ・**テーマ** 日常で感じた親子・家族の絆!
おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃん、きょうだい、いとこ、ペット…
家族と過ごす日常の中で感じた "絆"について考えてみよう。
- ・**応募資格** 全国の小学校1年生～6年生の児童
- ・**表現方法** 親子・家族と一緒に過ごした経験から、上記のテーマにそった作品を提出する
(作文部門:応募者本人が書いた作文)
(絵・写真部門:応募者本人が描いた絵、または応募者本人が撮った写真のどちらか)
- ・**審査基準** 家族や親子の絆を、自分なりの言葉や発想をもとに、作品に表現できていること。
- ・**応募作品について**
 - 〈作文部門〉 ・400字詰め原稿用紙に日本語で3枚以内。作品は右肩をホチキス留めのこと
 - 〈絵・写真部門/絵〉 ・応募者本人が描いたもの
 - ・A4(210mm×297mm)もしくは、A3(297mm×420mm)用紙(縦長・横長不問)に描かれたもの
 - ・紙質不問(画用紙が望ましい) ・筆記具不問(絵の具、クレヨン、色鉛筆、鉛筆など)
 - 〈絵・写真部門/写真〉 ・応募者本人が撮影したもの ・2Lサイズ(178mm×127mm)以上にプリントしたものを提出。
- ・**後援** DACグループ 台東区教育委員会 北海道仁木町 北海道仁木町教育委員会
北海道余市町教育委員会 千葉市教育委員会

大人が変われば子供も変わる
このころの東京革命

審査員特別賞

- 池田澄季 中野区立緑野小学校6年生 作文「家族のいない人生なんて」
- 高須苺姫 練馬区立大泉北小学校6年生 作文「憧れの母親」
- 藤澤佑紀姫 台東区立松葉小学校2年生 作文「あまりあえないちちとおかしの山」
- 加藤月那 練馬区立大泉北小学校5年生 絵「かたぐるま最高!」
- 大尊寺那優 墨田区立柳島小学校6年生 絵「しあわせを描く。」

優秀賞 (五十音順)

- 石山愛夏 新潟市立東青山小学校3年生 作文「おじいちゃんへの手紙」
- 大森花音 墨田区立梅若小学校3年生 作文「じいじとのやくそく」
- 掛水唯花 新宿区立四谷小学校2年生 作文「いとことの大ぼうけん」
- 川合穂花 千代田区立九段小学校6年生 作文「雷がつかない絆」
- 久保日和 仁木町立仁木小学校5年生 作文「温かいスケートリンク」
- 鈴木董 板橋区大谷口小学校6年生 作文「私と母の夢」
- 鈴木飛海 板橋区立第九小学校6年生 作文「スズキズナ」
- 塚本唯香 台東区立根岸小学校2年生 作文「お父さんがんばってね」
- 仲村颯太 荒川区立第三瑞光小学校1年生 作文「かぞくのきずな」
- 福森章瑛 練馬区立大泉北小学校6年生 作文「キズナ～愛してる～」
- 藤澤佐保姫 台東区立松葉小学校6年生 作文「涙の向こう側は」
- 星川愛乃 新宿区立戸山小学校4年生 作文「お兄ちゃんと月」
- 松田みなみ 千代田区立富士見小学校4年生 作文「みんなの幸せのしゃぼん玉」
- 村田健太郎 墨田区立曳舟小学校5年生 作文「運命の「絆」」
- 稲餅虹心 杉並区立第十小学校2年生 「目には見えない思いやり」
- 大橋 茉由 墨田区立外手小学校2年生 「きらきら」
- さいとう なるみ 荒川区立赤土小学校3年生 「ばあちゃんとのさい後の写真」
- 佐藤 綺音 仁木町立仁木小学校5年生 「大好きな弟との楽しい時間」
- 佐藤 正悠 渋谷区立神宮前小学校1年生 「儂くも美しく、咲け いのちのはな!」
- 上木 沙姫 台東区立田原小学校2年生 「じじと、おにいちゃんといとこ」
- 新富 遥菜 板橋区立成増ヶ丘小学校4年生 「家族みんなでりんごのしゅうかく」
- 白幡 菜々子 中野区立塔山小学校3年生 「みんなで食べるすいかはおいしいな」
- 登智博 浜松市立佐藤小学校2年生 「わがやの日じょう」
- 平田千尋 文京区立駕籠町小学校3年生 「ばあばの退院祝い会食」
- 古川美優 台東区立東泉小学校5年生 「夏の思い出(妹とわたしの夏祭り)」
- 村上煌宙 さいたま市立常盤小学校1年生 「家族でルンルンお花見」
- 安崎蒼衣 仁木町立仁木小学校3年生 「お母さんがごはんを作っているところ」
- 山下未来 練馬区立豊玉東小学校3年生 「サクラまんかい えがおいっぱい!!」
- 和田澤夏 江東区立南陽小学校3年生 「桜の木の下で楽しく遊んだ日」
- 渡部美冬 文京区立駕籠町小学校6年生 「分けあえること」

たける

白澤悠 墨田区立第一寺島小学校6年生

健常者って何だろう？

私には弟がいます。名前は「健(たける)」です。元気よく、健やかに育ってほしいという願いがこめられています。たけるは、今年小学一年生になりました。

私が小学校に入学したとき、たけるは一才でした。登校するとき、目の前の登校班の班長さんを見ながら、「私が六年生になつたとき、たけるは一年生だ。たけると一緒に登校するのかな？」と考えていました。

でも、一緒に学校に行くことはできませんでした。たけるが自閉症だったためです。

自閉症は発達障害の一つで、コミュニケーションや言葉の発達の遅れ、行動や興味の偏りなどの特徴が現れると言われていいます。たけるは言葉の発達に遅れがあり、今でも上手に話せません。家にいるときはかんたんな手話や文字板で「会話」しています。私は小学二年生のとき、母に「たけるって健やかなの？」と聞いたことがあります。たけるは障害者であって、健常者ではないと思っていたからです。健常者でないなら、健やかではないのが、といろいろ考えているうちに、頭の中がごちゃごちゃになってしまい、混乱していました。

母は、「健やかだよ。たけるはたけるらしくがんばっているんだから。それに、心はお姉ちゃんと同じくらい健常だよ。」と答えました。

私はそれから、人を健常者、障害者とわけて考えるのではなく、一人の「あなた」として考えるようになりました。体に不自由があっても、心が健常なら「きずな」を築くことができるはずですよ。

休日はたけると公園で遊んだり、テレビを見たり、隅田川へ行ったりします。また、たけるは絵を書くのが好きなので、たけるのかいた絵を家族でかんしょうしました。たけるは漢字も得意で小学三年生くらいの漢字は読めるので、一緒に漢字ドリルを見ることもあります。私が宿題で使っている漢字ドリルを勝手にどこかへ持っていってしまうこともありますが、そんなところもかわいいです。

そんな日々をくり返すうちに、私は昨年、十一才の誕生日をむかえました。放課後、私がぼうっと立っていると、たけるが私のこしをとんとんとたたきました。私が振り向くと、健はにこっと笑って「はうあ」と言ったのです。きっと、「はるか」と言ってくれたのだと思います。とてもうれしい誕生日プレゼントでした。

たけるは今、支援学校で、楽しい学校生活を送っています。いろんな人と「きずな」を育んでほしいです。

それに私も、いろいろな「あなた」と「きずな」を大切にしていきたいです。

私にとっての「絆」とは

じがっつじがった瞬間

保護者より

家族以外の第三者の方に作品を選んで頂いたことで、作文を書くことが更に楽しくなったようです。また、作品をとおして娘が家族を大切に思っていること、普段考えていることがわかり、親として感慨深いものがありました。娘には楽しいことだけでなく、つらいこと苦しいことなどもたくさん経験していくことと思いますが、家族がいつも味方であり、支えあっていくことを忘れずに日々を大切にすごしてほしいと思います。

お父さんと僕の関係

辰市朔 板橋区立中根橋小学校6年生

僕の家族は僕が小5の夏に離婚をした。

三人だった家族が一人と二人になった。一人はお父さんで二人はお母さんと僕。

僕は全然悲しくなかった。

離婚は世間一般に悲しいものと思われている。仲の良いお父さんとお母さんにいつも笑っている子供。でも僕の家族はそうじゃなかった。お父さんは仕事から帰るといつも酔っ払っていて、いつもお母さんに暴力を振っていた。僕はお父さんが大嫌いだった。だから離婚をするって決まった時、すっーと胸の中が軽くなった。

そんなお父さんには、離婚したら会わないと思っていたけど違った。お父さんが僕に遊ぼうってさそってくるようになった。一緒に住んでいた時は全然遊ばなかったし会話すらしなかったのに。頻繁にメールをしてきて映画のチケット買ったから行こうよ。なんて勝手な事を言ってくる。あんなにひどい目にあっていたお母さんも、行っておいでよ。なんて笑って言っている。僕が「あいつが今までにしてきた事忘れたの?」って怒って聞いたら、「なんだっけ、昔の事だから忘れちゃった。朔に会いたいんだよ。今は優しいならいいじゃん。行きたくないなら行きたくないって言えばいいよ。」なんて気楽な事を言っている。始め僕は警戒していたけど、お父さんはお酒を飲まなくなった。電話が来る時に酔っ払っている時はあるけど、僕の前では飲まなくなった。映画のチケットを勝手に買うのはしょっちゃん、他にも新しいパッシュ買いに行こう、格好いい服買いに行こうよ、なんてあの手この手で僕を誘惑してくる。この間のゴールデンウィークなんて、冗談のつもりで大阪に行きたいって言ったら本当に連れて行ってくれたんだ。お母さんには悪いかなって思ったけど、これは行くしかなかった。

三日間の大阪旅行はすごく楽しくて、お父さんはお母さんとお僕の友達にお土産を買って僕に渡してくれた。リュックはすごく重くなったはずなのに、僕はそれ程重たく感じなかった。大阪から帰って僕はお母さんに旅行での話を沢山した。USJでどんな乗り物に乗ったかとか、たこやきがすごくおいしかった事とか。お母さんはまるで自分が行ったみたい楽しんで聞いて、「離れた事で仲良くなれたね。」って言っていた。

離婚したら、何故か仲良くなった僕とお父さん。

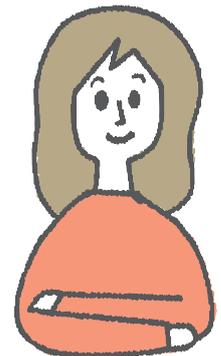
周りの家族と少し違うかも知れないけど、今ある家族の絆を僕は大事にして行きたい。

私にとっての「絆」とは

友情と愛情

保護者より

表彰式で受賞された他のお子様の作品を見て、それぞれの家庭の愛情、絆を感じ、感動していました。今後も今まで通り温かい気持ちを持ち、友情、愛情に囲まれて成長を続けていってほしいです。この度は立派な賞を頂き、誠にありがとうございました。



私の宝物

松戸珠音 国分寺市立第八小学校6年生

私には、三才下の妹がいます。妹はいつもケンカを売ってきて私がほめられても、すぐ「ふん!!私はどうせ何もできないよーだ。」とすねます。お風呂に入るときもさっと着替えてシャワーを取ってなかなか貸してくれないし、ご飯のとき私が話そうとするわざと先に話し始めたり。ねるときも私がねつこうとする私の上に乗って苦しめてきます。こんな私の妹。なのに私は、妹が大好きです。私にも不思議ですがきっと姉妹はそういうものなんだと思います。そして「そういうもの」が絆なのではないかと私は思います。

三年前、妹が喘息で一週間入院したことがあります。妹が入院したのは、小児病棟です。妹は長年。一人で大丈夫かとても心配でした。家に帰ってお風呂に入るとき、いつもなかなか貸してくれない妹がいません。ご飯のときもねるときも。本当は、いなくてのびのびするはずなのに。いつも妹に困っているのに。一週間、好きにシャワーも使える、お母さんにおしゃべりできる、気持ち良くねつける。でも…気付けばすぐいる妹がなくて会いたい気持ちでいっぱいです。でも、妹がいる小児病棟はお見まいに行っても十八才以上でないと面会できません。妹が欠けることが私にとってこんなに苦しいことだったなんて。はなれるまで気付かなかったけれどはなれてから痛いほど良く分かりました。私にとってあれほど長かった一週間はないです。妹の退院日。今までの会いたかった思いがあふれ出て、ドアから出てきた妹をだきしめました。こんなに小さい体で一人でいたなんて、私よりつらかっただろうなと心から思いました。私は、妹のことが大好きです。

今も、妹とは毎日ケンカしています。入院した後妹は変わりません。でも、あの後少しだけ妹を大切にするようになりました。「三才下なんだからね。」と少し許せるようになりました。生意気な妹。でもそれ以上に大好きな妹は、私の一番大切な宝物です。



私にとっての「絆」とは

人と人との
思いの結び目

保護者より

受賞前は思いついたときに、自由気ままに物語などをよく書いていましたが、受賞後は自分の文章を人に読んでもらう事の楽しさを知ったようで「また作文を書きたいな」と言うようになりました。2学期に入り、学校で作文の課題が出た時も、与えられた題材について調べ、どういう視点から書こうかと考えてから取り組んでいました。

絆コンクールで最優秀賞を頂いて、自分の行動を誰かに認めてもらった時の喜びや誇らしさを深く感じたようです。好きな事を大事にしなが、努力や苦しみを伴う事からも逃げずに乗り越え、自分の人生を切り拓いていってくれる事を期待します。



家族と一しょに

水上双葉 墨田区立両国小学校3年生

みんなと同じ物を食べることに、私は、それがとてもしあわせなことだと知っています。なぜなら、私には食物アレルギーがあり、ずっとみんなとちがう物を食べてきたからです。

そのことに気付いたのは、保育園に入ってからです。食物アレルギーなので、友だちと同じ物を食べられません。きゅう食もやつも、いつも自分だけちがう物でした。きゅう食の時間になると、友だちが食べている物がおいしそうに見えて、とてもうらやましく思いました。

保育園に入るまでは、家族で同じ食事をしていました。「家ではみんなと同じ物を食べられるのに、保育園では、どうして友だちと同じ物を食べられないの?」「私も友だちと同じ物を食べたい!」と、お母さんに自分の気持ちをぶつけました。すると、お母さんは、私が保育園に入る前の話をしてくれました。お母さんは、家族で同じ物を食べられるように色々勉強したそうです。アレルギーの物を使わないメニューを工夫してくれました。お父さんは、使われている原材料を何度も何度もかくにんして買い物をしてくれたそうです。お兄ちゃんがアイスやケーキをがまんしてくれていたことも初めて知りました。だから家では、いつもみんなと同じ物を食べられていたのです。家族の思いやりがあったからできたことで、あたり前のことではなかったのです。

私は、保育園や小学校でも、みんなと同じ物を食べたいと思うようになりました。すると、お父さんとお母さんが色々調べてくれて、特別なちりょう方法があることがわかりました。それは、アレルギーしょうじょうの出る物を少しずつ食べて、めんえきをつける方法です。そのちりょうをするために、家から遠いびょういんまで、いつもお母さんが連れて行ってくれました。ちりょうをつづけるのがつらくなるときもありました。体がかゆくなったり、強いしょうじょうがでたりしたこともあります。それでもがんばれたのは、お父さんやお母さんがはげましてくれていたからです。

家族が協力してくれたおかげで、今ではほとんどの物を食べることができるようになりました。一しょにアイスを食べられるようになって、お兄ちゃんはとても喜んでくれました。初めて家族と一しょに丸いたん生日ケーキを食べたときのことは今でも忘れません。

学校のきゅう食も、みんなと同じ物を食べられるようになりました。みんなと同じ物を食べられるのは、とてもしあわせなことです。ここまでがんばれたのは、ずっと私の気持ちを大切にしてくれて、家族が協力してくれたからだと思います。私も、お父さん、お母さん、お兄ちゃんの気持ちを大切に、思いやりのある仲良し家族でいたいと思います。

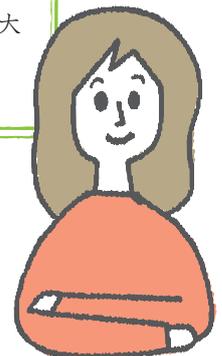
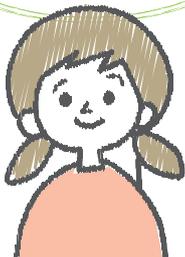
私にとっての「絆」とは

思いやり

保護者より

受賞後、学校の全校朝会で自分が書いた作文を校長先生が読んでくれたそうです。

自分の作文を改めて聞いたことで、家族とのエピソードの場面がいろいろと頭にうかび、自分がいかに大切に育てられているかを感じたそうです。娘には、その気持ちを忘れずに、思いやりの気持ちを持って、人との絆を大切に育んでいって欲しいと思います。



おばあちゃんの家で いとこと妹とわたし

相澤里月 練馬区立小竹小学校3年生



私にとっての「絆」とは

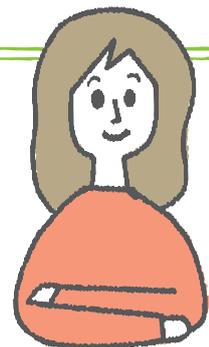
わかりあえること



保護者より

絵に関しては大きな自信となった様で、積極的に美術館へ足を運びたがり、「絵が好き!」という気持ちも大きくなった様に感じます。

家族に対しても「一緒だと楽しいね」「一緒に食べた方が美味しいね」と言う姿が見られたり、「お母さんは小学生の頃どんな絵を描いてた?」と聞きたがるなど、親子や家族に対して改めて本人なりに考えている様子がありました。今後、好きな事を得意な事とし続けることはとても大変な事であるとは思いますが、真直ぐにこつこつと努力して行ってほしいと思っております。



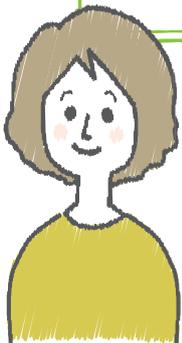
おじいちゃん、おばあちゃんと名古屋へ

石井美咲 仁木町立仁木小学校2年生



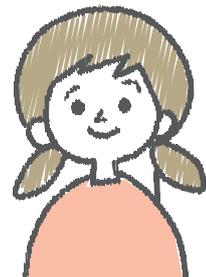
保護者より

今回『親子の日 絆コンクール』に応募させて頂いた作品は、子供が初めて飛行機に乗っておじいちゃんのふる里、名古屋へ旅行した思い出を絵に描いてみました。みんなで楽しく過ごした思い出を絵に描くことで、より心に残ってくれる事でしょう。そしてまた、最優秀賞に選んで頂き、東京旅行に参加する事が出来ました。東京の子供達とも仲良く出来て本当に良かったです。何事にもチャレンジし、沢山のお友達と出会って楽しんでいて欲しいです。



私にとっての「絆」とは

いつも見まもって
くれている
やさしいハジ



丘の向こう側の空を探しに

吉本志 板橋区立成増小学校4年生



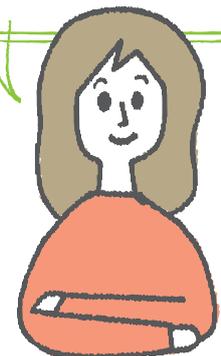
私にとっての「絆」とは

見えないつながり



保護者より

この受賞が、ひとつの成功体験になったようで、何事にも積極的に取り組むようになりました。また、プロカメラマンのブルース・オズボーン氏に写真を撮ってもらったことも嬉しかったようです。具体的なエピソードとしては、絵画コンクールをはじめとしてスポーツ大会等積極的に参加して取り組む姿勢が見られます。今後は、何事にも楽しみながらチャレンジしていくことを期待したいと思います。



親子三世代(母～娘)

山本陽翔 台東区立浅草小学校1年生



保護者より

もともと写真を撮ったり見たりする事が大好きでした。今回撮影した写真の数日後に曾祖母が天国に行ってしまったこともあり、はるとにとっては初めてのとても悲しい出来事でしたが、賞をいただいた事により、家族で写真を見て曾祖母の話をする機会も増え、はるとも今では“ミチエバアバが大好き” “いつも天国でボクのこと見守ってくれているよ”と教えてくれます。また、今回の受賞で祖父母を連れて北海道旅行に行くことができ、まさに曾祖母が残してくれた絆だと深く感じています。はるとには、これからも人の気持ちによりそえる、温かい心が育っていけばと願っています。



私にとっての「絆」とは

たからもの



第6回 親子の日 絆 (KIZUNA) コンクール

実施要綱

- ・応募期間 2018年6月1日～9月14日
- ・テーマ 日常で感じた親子・家族の絆
- ・応募資格 小学校1～6年生、中学校1～3年生

・応募作品について

< 作文部門 >

- ・応募者本人が書いた作文
- ・400字詰め原稿用紙に日本語で3～5枚に書かれたもの
- ・作品は右肩をホチキス留めの上、提出

< 絵・写真部門 >

<絵/選択>

- ・応募者本人が描いたもの
- ・8切判 (271mm×391mm相当 縦長・横長不問) に描かれたもの
- ・紙質不問 (画用紙が望ましい)
- ・筆記具不問 (絵の具、クレヨン、色鉛筆、鉛筆など)

<写真/選択>

- ・応募者本人が撮影したもの
- ・8切判にプリントしたものを提出

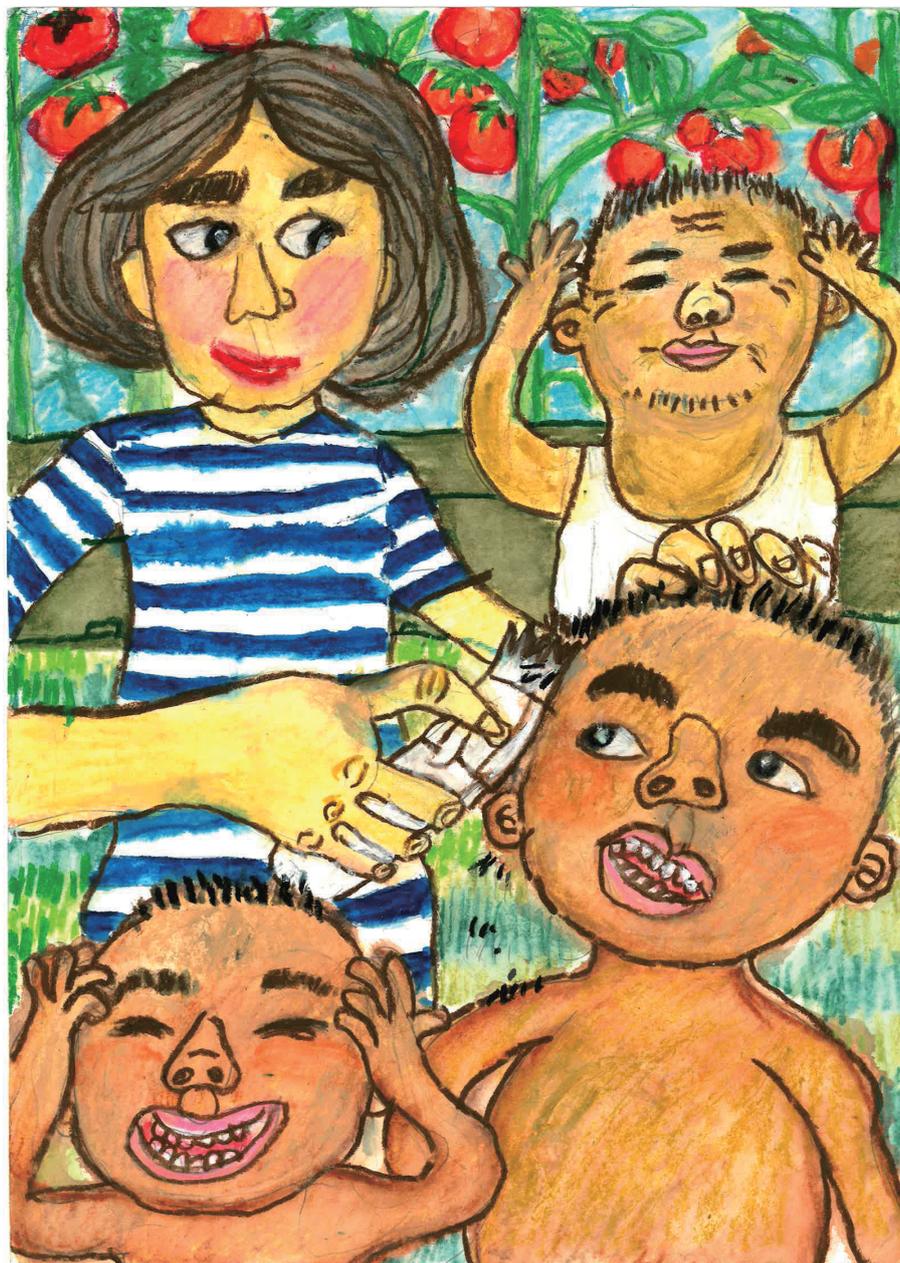
- ・後援 DACグループ 台東区教育委員会 中央区教育委員会 仁木町 仁木町教育委員会 余市町教育委員会 京都市教育委員会 佐野市教育委員会 町田市教育委員会 小金井市教育委員会 八王子市教育委員会 千葉市教育委員会 岐阜市教育委員会 東広島市 東京都教育委員会

優秀賞

高橋 みいな おとうとがうまれたよ
仲村 颯太 家族の絆
栗栖 和 ママのおなかに“むう”が来た！
阿知波 ハル 今夜は父さんより食べてやる！
渡辺 望々花 昔からの絆
中村 七海 おおきいおばあちゃんのゆめ
北村 唯香 いっしょ (一緒)
島 あさひ 夏休み、海でみた夕日
菱山 千夜里 いつも一緒に
赤羽 琴亜 私だって新しいものがほしい！はじめての“おふる”じゃない三輪車
山本 陽翔 楽しそうなふたり～ぼくのお父さんとお母さん
腰越 怜奈 106才のひいばあばと親子4世代
橋本 りつき 観らん車に乗って
小野 翔太郎 秋を撮ろう
北島 和真 お母さん妹をうんでくれてありがとう
城地 良葉 大切な青いグローブ
谷川 純白 日本一の家族
高橋 環 北海道地しん
谷川 あさひ 我が家に生まれて幸せです
住吉 風輝 大切にしたい祖母との時間
坂梨 陽世 兄の親指
池田 真菜 言葉の価値観
梁瀬 百花 おまもり
爲本 二依菜 母へ
多賀 真理奈 家族の絆
草深 希 感謝の気持ちと無償の愛
石原 凜 祖父が教えてくれたこと
渡邊 愛良 双子の絆
庄司 大和 僕の幸せな普通じゃない家族
西台 萌音 トラを育てた犬

じいじの家でヘアカット (みんなぼうず)

多摩市立多摩第三小学校 3年生 山口 さくら



【審査員コメント】

パッとひと目見て引き付けられるダイナミックで魅力的な作品でした。

家族の方々の一人ひとりの表情を実に上手に捉えています。

特に兄弟のお兄ちゃんらしさと弟のやんちゃな感じの顔の表情は最高です。

色の使い方も明るく、肌の色も一色でなく何色も上手に使い分けている点は見事です。

見る側をほのぼのと楽しくさせてくれる作品でした。

肩上げ ひいおばあちゃんからつながる浴衣

練馬区立小竹小学校 4年生

相澤 里月



【審査員コメント】

日常生活の何気ないテーマですが、むずかしい描写に取り組まれ、構図も良く、立体感が出ています。特に人物の細かい手の動きや動作など、表現方法がすばらしく、状況が見る側にも伝わってきます。

お母様の顔の表情(メガネがちょっと下がった感じ)も良く描けています。

昭和を思い出させてくれる最高の作品でした。

パパとの約束

西宮市立甲武中学校 1 年生

橋本 さゆき



【審査員コメント】

必要な情報だけを映し込むということが写真を撮る基本の一つですが初心者は往々にして、自分の目に入る全ての情報を映し込もうとしてしまいます。

橋本さんの写真は、「パパとの約束」というテーマを強調する為に画面には必要な情報だけ撮ったことで、結果として見る人の心に響く作品となりました。

光の使い方を学んだら、もっと素晴らしい作品になるのではないかと思います。

今後に期待が膨らみます。

離れていても家族

文京区駕町小学校 2年生 笹川 幸葉

私の父は、たんしんふにんで青森にいます。

だから、じゅぎょうさんかんも来れないし、たんじょう日もいっしょにすごせません。

きょねんの夏休みは、くみんセンターのプールで父とおよぐれんしゅうができたけれど
今年一人で学校のプールに毎日かよってれんしゅうをしています。なかなかバタ足ができるようになりません。

父が青森に行く日、家ぞくでしんかんせんのホームまで見おくりに行きました。妹が泣いていたけれど、兄と私はがまんしました。

兄も私もさびしかったから手をつなぎました。本当は、しんかんせんをおいかけて走りたかったです。みんながおちこんでしまったので、かえりみちに母がアイスを一ずつ買って来て「がんばろうね。」と言いました。そのあとみんなで夜なのにさんぽをしました。母も

父もきっとさびしいんだろうなと思いました。

父は、まいしゅう土曜日の夜に電話をしてくれます。だから土曜日がすきになりました。土曜日じゃない日に電話をくれることもあって、その時はものすごくうれしいです。みんなで電話のとり合いをします。それから、私たちがしんぱいになった時も、れんらくをくれます。この前、東京に台風がきた時、父はニュースで見てすぐにメールをくれました。私も毎日、てんきよほうで青森をチェックしています。

父とはなれてわかったことがあります。それは、いっしょにくらしていても、はなれていてもいつもおたがいをしんぱいしていて、だいじにおもっていることが家ぞくなんだ。ということです。さみしいけど心がつながっているから大じょうぶです。

私は、電話やメールで父にいろいろなことを話したいから、この夏休みはたくさんのご事にちょうせんしてみようと決めました。まず、はじめての囲碁の大会に一人で出ることです。それから、今までふあんだった子どもキャンプのさんかと、妹のほいく園でのボランティアたいけんをします。そしてさいごは、夏休みがおわるまでにバタ足ですすめるようにすいえいのれんしゅうをすることです。ぜんぶたいへんそうだけれど、父はぜったいびっくりすると思うし、きっとよろこんでくれるから、たのしみです。

私は、早くなくてもいいから父に会いたいです。

【審査員コメント】

小学校2年生でも、とても言葉の力(語彙力:ごいりょく)があるのに感心しました。

「はなれていても家ぞく」、その題のとおり、離れているからこそ「絆 きずな」が強くなる様子が、プール、新幹線 のホーム、アイスクリーム、散歩、電話、メールなど具体的な日常をありのままに描くことで、生き生きと伝わってきます。

離れて暮らすお父さんをびっくりさせ、喜んでもらえるように、

「たくさんのご事にちょうせんしてみよう」と決めた心がとても素敵です。

きずなの縄

魚沼市立六日町小学校 4年生

小野 智桜

「ヤバイ。これはマジでヤバいやつや。」

体育の授業。私は、すごくあせっていた。全然、縄とびが出来ないのだ。

周りのみんなは、かんたんにピョンピョコウさぎみたいにとんでいた。私も縄を回してとんでみるけど、やっぱり、ひっかかってしまう。うさぎやカエルの気持ちになってもダメだ。回す手と、とぶタイミングがさっぱり分からなかった。

みんなが楽しそうに縄とびをしているすがたを見ると、目が熱くなって、鼻のおくがツーンといたくなってきた。私の大きらいなく前のいたさだ。

「何かあった？」

家に帰るとすぐにお母さんが心配そうに私の顔をのぞいてきた。

するどい。

こういう時のお母さんは、うらないババににている。いやな事があつたり、テストが悪かった時、悪さをした時なんか100%当ててくる。

「べつに。」

「べつにちゃうやろ。」

おまけに、うらないババは、めちゃくちゃしつこい。

私は、家族にはぜったいに言いたくなかった。だって、縄とびがとべないって言ったら、「あんなかんたんなもの何で出来んの？」と、言われそうだし、すごく笑われそうだったから。

「なっー、なっー？何があったんか言うてごらんよっー。」

せなかをつつくのを本気でやめてほしかった。あまりのウザ…しつこさに言ってしまった。

「縄とびが出来ん。」

「ほっ〜。ほほっ〜。」

お母さんは、ふくろうみみたいな声を出す。フムフムと何度もうなずきながら、つくえやソファーを動かして始めた。

何をしたいのか意味不明だったけど、うれしかった。お母さんは、私のことを笑ったりしなかった。

「ほれ。ここで縄とびしてみ？」

広くなったリビングで縄とびを始めた。今ならとべそうな気がした。

「…。」

でも、無理だった。それから、お母さんと縄とびのとっくんが始まった。

「縄をよく見て！」

「うん。」

「バネの気持ちになって！」

「うん…バネ!？」

たまに、わけの分からないことも言われたけど、がんばって縄とびをした。お兄ちゃんもお父さんも、いっしょになって教えてくれた。

「あせつたらあかんで。足にパチャンって縄が当たったら、ピョンってとぶんや。」

お父さんが教えてくれて、お兄ちゃんが手本を見せてくれた。

パチン、ピョン。

パチン、ピョン。

出来た!

家族みんなが、手をたたいてくれた。

「やったな!出来たな!」

でも、これ出来たって言えるのかな・・・。

ぜったいにちがうと思ったけど、すぐくまんぞくしていた。クラスのみんなとくらべると、すぐく下手だし、とぶのもおそいけど、家族が出来たと言ってくれたから自信がついたんだと思う。

みんな助けてくれてありがとう。笑わずに、しんげんに教えてくれてありがとう。

お母さんは、ごはんを作っているとちゃうやったのに。お父さんも、仕事でつかれていたのに。お兄ちゃんは・・・ひまそうやったからな。でも、

「みんな、ありがとう!」

「どういたしまして。」

あの時のことを思い出したら何だか体の中が、やきいもみまいにほくほくして、くすぐったいや。

家族だから、きずなは元からあると思う。

だけど、家族をつないでいるきずなは、初めは細い糸でできているんじゃないかな。「ありがとう」「どういたしまして」を何度も言い合って、助け合いながら、りっぱで太い、ぜったいに切れないきずなの縄にしていくのだろう。

あの時、縄とびが出来なかったことは、くやしかったけど、家族をむすぶきずなの糸がレベルアップして太くなった出来事だったと思う。

そう考えると、縄とびが出来なくてよかったのかもかもしれない。

【審査員コメント】

「マジでヤバい」「うさぎやカエルの気持ちになってもダメ」「目が熱くなって、鼻のおくがツーンといたくなってきた」「大きらいなくな前いたさ」など、縄跳びが出来ない状況や気持ち、そして家族が協力する様子など、個性的な表現で生き生きと描いています。家族が助け合う中で「初めは細い糸でできている」絆を「りっぱで太い、ぜったいに切れないきずなの縄」にする、「そう考えると、縄とびが出来なくてよかったのかもかもしれない」、うまい終わり方です。

ひいばあちゃんの写真

学習院女子中等科 1年生 小林花

私には今年93歳になるひいばあちゃんがいる。三年前、大きな病気をしたが、必死のリハビリで今年も元気に母の実家で暮らしている。

ひいばあちゃんは東京生まれの東京育ち。小学校卒業後、当時まだ数少なかった女学校や洋裁学校にも通って勉強したのだと、話してくれた。しかし、戦争が激しくなり、お父様も病気で亡くなった。ひいばあちゃんはお母様と兄弟と一緒に今住んでいる茨城に疎開してきた。疎開先で終戦を向え、結婚した。

昨年、中学校受験の合格報告に行った時のことだ。母の実家でもみんなで合格を喜んでくれた。中でもひいばあちゃんは、学校の様子に興味津々だった。私の新学先が、ひいばあちゃんが女学生だったころからあった伝統のある学校だったからだ。制服は校章の入ったセーラー服であることも、校舎が緑に囲まれた中にあることも知っていた。

ひいばあちゃんはとても楽しみにしてくれていたのか、早速見せにいった。たくさん褒めてくれて、とてもうれしそうだった。そして、自分の女学校時代もセーラー服だったと話してくれた。

家に帰って、そういえばひいばあちゃんが通っていた女学校の名前を聞いていなかったことに気がついた。母に聞いたが、母も知らなかった。気になった私は電話してみた。電話に出たおばあちゃんも知らなかったので、ひいばあちゃんに尋ねると、つい昨日の事かのように当時の話を踏まえて教えてくれた。が、最後に寂しそうに、戦争で疎開する時に卒業証書以外は家に置いてきて、アルバムも当時の教科書や写真も、全て燃えてしまったと聞いた。なので、今もその学校があるかどうかも分からないと電話を切った。

母にひいばあちゃんから聞いた女学校の名前を伝えると、母がネットで調べてくれた。

私たちは聞き覚えがない学校名だったので、母ともしかしたら無くなってしまったのかなと調べましたが、あった。ひいばあちゃんの母校はあった。戦後の学制改革で学校名が変わり、校舎の場所も当時とは変わっていたが、ひいばあちゃんから聞いた創始者でもある当時の校長先生の事や、校歌の歌詞の一部など、間違いなくその学校だった。しかも一昨年、創立百周年を迎えたようで、百年を振り返る特設サイトもあった。そこには移転前の校舎や校内の風景、当時のクラス写真など数枚ではあったが掲載されていた。母と私はひいばあちゃんに見せようとそのページをプリントアウトした。

翌日、印刷したページをひいばあちゃんに届けた。ひいばあちゃんは本当に驚いて、校舎の話や、学校生活の話、担任の先生や風紀係の先生の話など、まるで女学生に戻ったかのように写真を見ながら話してくれた。そして、虫眼鏡でクラス写真を見ていたひいばあちゃんは「これ！こればあちゃんだよ！この写真、ばあちゃんが入学した時の写真だよ！」と叫んだ。ひいばあちゃんの入学当時のクラス名がしっかりと写真の端っこに入っていた。左端のひと際小さい女の子がひいばあちゃん。

両隣の子の名前や仲の良かったお友達も見つけ出し、ひいばあちゃんは言った。「こんなことってあるのね。この写真よ。見覚えある。そう、ここに立って端から4番目。」まさか、こんな偶然があるとは私も想像していなかった。ひいばあちゃんは涙目で何度も、何度も虫眼鏡を使ってその写真を確認しては、「これはばあちゃん、隣が〇〇ちゃん」と話してくれた。

空襲でひいばあちゃんの女学校時代のものは焼けてしまった。どんなに悲しかっただろう。そして遠く離れて知り合いもない場所に疎開し、結婚して家族を守ってきたひいばあちゃん。女学校時代の同窓会も一度も参加することなく、アルバムさえ見ることが出来なかったひいばあちゃんがこんな巡り合わせで再び写真を見ることができるとは。受験中、ひいばあちゃんはいつも応援してくれた。自分の体のこともあるのに、「何も出来ないけど」と励ましてくれた。私は、そんなひいばあちゃんに、この写真でほんの少しだけれど、お礼が出来たような気がした。そしていつか、ひいばあちゃんの覚えていた同窓生と会える機会が作れたらいいなと思った。

入学した後も、遊びに行くたびに私は学校の話をする。ひいばあちゃんは本当に楽しそうに聞いてくれる。その傍らには、プリントアウトしたクラス写真が飾ってある。

【審査員コメント】

93歳になるひいばあちゃんとの交流を、進路先中学校のセーラー服と女学校時代の思い出を重ね合わせながら、まるで謎解きのように話が展開します。疎開し、アルバムや写真など思い出の品を空襲で失ったひいばあちゃんの悲しみや、かつて通った女学校のHPの内容をプリントアウトして届けるなど、ドラマチックな展開です。学校の話を楽しそうに聞く曾祖母の傍らにある「プリントアウトしたクラス写真」が、作文全体を象徴的にまとめています。

